

# The Gentile Times Reconsidered

## Chronology and Christ's Return

*Carl Olof Jonsson*

増補改訂版(第4版)

# 異邦人の時 再考

## 年代学とキリストの再臨

C.O.ヨンソン  
著

クリスチャンブック研究会  
訳

ルカによる福音書21章24節の聖句「異邦人の時代」は過去2世紀のあいだ  
キリストの再臨を期待する人々の間に推測と失望をもたらしてきた。

この信条の起源と発展はどのようなものか？  
歴史と聖書の事実から分かる事とは何か？

せせらぎ出版

The Gentile Times Reconsidered  
Chronology and Christ's Return

*Carl Olof Jonsson*

増補改訂版(第4版)

異邦人の時 再考

年代学とキリストの再臨

C.O.ヨンソン  
著

クリスチャンブック研究会  
訳

せせらぎ出版

Carl Olof Jonsson,  
*The Gentile Times Reconsidered;*  
*Chronology and Christ's Return.*  
(fourth edition)  
Commentary Press, 2004

日本語版出版にあたり、  
原著者および出版社とのコンタクトを試みましたが、  
連絡がつきませんでした。  
この件の情報をお持ちの方はご一報ください。  
(せせらぎ出版)

## 目 次

|           |     |
|-----------|-----|
| 前書き ..... | vii |
| 序文.....   | xi  |

## 第1章 解釈の歴史 ..... 1

|                                |    |
|--------------------------------|----|
| 1日を1年とする原則 .....               | 1  |
| ユダヤ人の学者が用いた .....              | 3  |
| キリスト教解説者の間における「日を年にする原則」 ..... | 4  |
| この原則を異邦人の時代に適用する .....         | 6  |
| 絶えず変わる日付 .....                 | 7  |
| 政治および社会の変動が予言的推測をあおり立てる .....  | 8  |
| John Aquila Brown .....        | 11 |
| 2,520年を異邦人の時と結びつける .....       | 13 |
| ミラー派の運動 .....                  | 14 |
| ミラー派の運動から派生したグループ .....        | 16 |
| ネルソン H. バーバー .....             | 17 |
| 「目に見えない臨在」 .....               | 18 |
| チャールズ・テイズ・ラッセル .....           | 20 |
| 1914年を待ち望む .....               | 21 |
| 深まる疑念 .....                    | 24 |
| 大戦の勃発に対する反応 .....              | 28 |
| 要 約 .....                      | 31 |
| 第三版およびその後の版第一章の追加 .....        | 34 |

|                              |     |
|------------------------------|-----|
| <b>第2章 聖書の年表と世俗の年表</b>       | 54  |
| 聖書の年表の本質                     | 54  |
| 世俗の資料を抜きにした「聖書の年表」は存在するのか    | 56  |
| 聖書への忠実 — それとも預言的な推測への忠実？     | 58  |
| 最初の起算点の挫折                    | 59  |
| 紀元前539年 — 「ヘブライ語聖書のための絶対日付」？ | 62  |
| 天文学と紀元前539年                  | 66  |
| <b>第3章 新バビロニア諸王の治世の長さ</b>    | 74  |
| A. 古代の歴史家                    | 76  |
| B. 楔形文字の文書                   | 82  |
| C. 同時代のエジプト年表との同時性           | 115 |
| 要約と結論                        | 122 |
| <b>第4章 新バビロニア時代の絶対年表</b>     | 146 |
| バビロニア天文文書の研究                 | 146 |
| 古代の天文学                       | 147 |
| バビロニア天文テキストの特徴               | 148 |
| A. 天文日誌                      | 149 |
| B. サターン タブレット                | 161 |
| C. 月食タブレット                   | 163 |
| 要約と結論                        | 176 |
| <b>第5章 バビロンのために七十年</b>       | 190 |
| 時に関する預言と歴史 — その教訓            | 191 |
| A. エレミヤ25:10-12              | 193 |
| B. エレミヤ29:10                 | 205 |

|                                      |     |
|--------------------------------------|-----|
| C. ダニエル9:1-2                         | 212 |
| D. 歴代誌 第二 36:20-23                   | 217 |
| E. ゼカリヤ1:7-12                        | 222 |
| F. ゼカリヤ7:1-5                         | 224 |
| G. 隷属の七十年の適用                         | 226 |
| <b>第6章   ダニエル書4章の「七つの時」</b>          | 243 |
| A. 1934年預言                           | 243 |
| B. 異邦人の時は2,520年の「七つの時」か?             | 249 |
| C. キリストの王国の建てられること                   | 260 |
| D. 1914年に対する釣り合いの取れた見方               | 277 |
| E. ルカ：24の「異邦人の時代」に関する若干の注釈           | 281 |
| <b>第7章   証拠を覆そうとする企て</b>             | 295 |
| A. 「あなたの王国が来ますように」に<br>ものみの塔協会が付けた付録 | 295 |
| 要 約                                  | 317 |
| B. 学識あるエホバの証人の書いた非公式の反論              | 320 |
| <b>付 録</b>                           | 329 |

## 前書き

「異邦人の時」は今の時代の人々それも何百万の人にとって重大な問題である。ご自身の再臨と世の終わりについて問われた時、キリストは、ただ一度この言葉を用いられた。その後何世紀にも涉って、この語句は数多くの期間に適用され、あまたの解釈が加えられてきた。

本書は極めて広い視野からこの問題を扱っているとは言え、一つの解釈すなわち何百万人のエホバの証人にとって彼らの生きる時代を間違いなく意義付けると共にキリストの言われた、のべ伝えるべき「王国の良いたより」とは何かを判断する上で強力な決め手と彼らが考える解釈に主な焦点が当てられている。それはキリストとキリストの王国の関心事を代表すると唱える宗派にとって、その主張の正当性を試す要としてエホバの証人が自分たちのために用いている解釈である。意外な事実を言えば、この解釈は「借り物」の根拠に基づいている。本書の著者が文献で証明しているように、その起源はエホバの証人の組織が世界に登場する殆ど半世紀も前にさかのぼる。

宗教の教義において、ただ一つの日付すなわち1914年という日付がこれほど広範囲に決定的な役割を果たしたことは殆ど例を見ない。しかしその日付の背後にもう一つの日付がある。その日付の裏付けが無いと1914年に付与された意義は消失してしまう。先行するその日付とは紀元前607年である。それはエホバの証人の宗教が特定の出来事―バビロンによるエルサレムの滅亡―に結びつけている日付であり、問題の根幹をなす最も重要な点となっている。

1977年スウェーデンの Carl Olof Jonsson から届いた論文が与えた衝撃は、いま本書の編集に携わり、27年前にはエホバの証人のニューヨーク州ブルックリン国際本部の執筆部門に属していた我々自身にとって今なお記憶に新しい。文献による証明の豊富なことに留まらず、なおのこと証拠の強力なことに一同は驚嘆の念を禁じ得なかった。事実、我々はこの資料にどう対処すべきか途方に暮れたのである。後日この論文を基に Carl Olof Jonsson の著書 *The Gentile Times Reconsidered* 「異邦人の時 再考」が書かれ、版を重ねること4回



に及んでいる。

現在この本を読むことで、30年余にわたり周到かつ徹底的に為された研究の成果から益を得られるのである。膨大な時間のみならず、極めて広範囲にわたる研究を可能にした情報源の利用は一般の及ぶところではない。著者は大英博物館その他の施設の利用のみならず学芸員、何カ国ものアッシリア学者の協力を得、また個人的に文通を行った。

研究と調査は2世紀半もの過去にまでさかのぼる。そのような時代を「原始的」と思う人は多いかも知れない。しかし古代の民族の中には歴史上の出来事、王朝について記録したのみならず、台帳、契約書、在庫、請求書、約束手形、証書その他、日付のある商業文書を用いていた民族があり、その進歩は意外に思われるほど高度に達していた。望遠鏡の無かった時代に月、惑星、星のような天体の動きや周期を理解していた程度は並大抵のものではない。これらの天体が「季節のしるし、日や年のしるしとなれ」との創世記の記述に照らせば、特に年代計算が中心的な役割を果たす研究において、これは真に意義深いと言える。<sup>1)</sup> 現代の原子時計を別にすれば、時を正確に計る上でこれらの天体に勝るものは無い。

新バビロニア時代の研究として質の高いことに触れて、アッシリア学者 Luigi Cagni 教授は次のように書いている：

[Jonsson の著書] を読んだが、その初めから終わりまで、アッシリア学の分野における著者の論述には賞賛と深い満足感を禁じ得なかった。バビロニア（およびエジプト）の天文学また紀元前1世紀の楔形文字テキストから得られる年代情報の論議の点で、特にそう言える。これはJonssonの論議の中核を成している。

～著者が真剣かつ周到なことは、天文学またバビロニア年代学の泰斗たとえば H. Hunger, A. J. Sachs, D. J. Wiseman 諸教授、大英博物館の Walker 氏その他の方々とひんばんに文通していることから明白である。

小生の専門とする新バビロニアおよびAchaemenid時代の経済・経営テキストに関して、Jonssonの評価は極めて正確であると断言できる。この本を読みながら著者の質を吟味したが、読み終えた時その結果は見事に合格と認めざ

るを得なかった。<sup>2)</sup>

本書初版また第2版の読者にとって新しい発見となる幾つかの新しい章を初め、全く新たな部分がこのたび加えられた。手紙その他の文書を含め、およそ30葉の図版が挿入されたことも、本書を読み易いものになっている。図版の多くは希少なもので、大半の読者にとって疑いなく目新しいに相違ない。

本書の元となった当初の研究によって著者がWatch Tower [ものみの塔]の組織と衝突する羽目になったのは不可避であり一予想される範囲内の事とは言え「背教者」すなわち異端として1982年7月に破門されるに至った。当初の二つの版には掲載されなかった劇的な事実を伝える話は、序文の中の「追放」の項に収録されている。

新バビロニア時代の年表に関する論議は大幅に加筆された。当初の二つの版に載せられた紀元前607年に対する7通りの反証は、それ以後、倍以上に増えている。天文テキストによる証拠は別個の章にまとめられた。第3章および4章に提示された証拠は桁外れに強力で、古代史のこの時期に対するものみの塔協会の年表とは一致しないことが余りにも明白なことを示し、その年表の誤りを論証するものとなっている。

世俗の古代資料が豊富であるとは言え、本書は基本的に聖書に依拠する書物である。「聖書の年表と世俗の年表」の章は、聖書年表を確定する上で、よくある重大な誤解、更にものみの塔の紀元前607年の日付を退けるならば、「聖書年表」よりも世俗の年表を重く見ているという誤解を解く。

類のない本書を読まれるならば、多くの方々が過去のことについてのより正確な知識のみならず、今の時代に対するいっそう啓発された見方、更に聖書の信頼性と史実性に対するより深い認識を得られることを確信してやまない。

編集者一同

## 注

- 1) 創世記 1:14, (新共同訳)
- 2) イタリアNaples大学アッシリア学教授Luigi Cagni訳*The Gentile Times Reconsidered* イタリア語版の前書きから抜粋。Cagni教授はとりわけEblaタブレットすなわち1975年以降シリアの古代都市Ebla（現在のアラビア語名：*Tell Mardikh*）の宮殿から出土している16,000ほどの楔形文字テキストの指導的な専門家である。1998年1月歿

## 序 文

この論文を出版するに至った経緯は瞠目すべき、また時として劇的であるけれども、それを書き記すには一巻の書を要するであろう。しかし紙数の関係があるので、その背景に簡潔に触れておきたい。

エホバの証人はものみの塔協会（Watch Tower Society）を信じて、その指導に頼るように教えられている。ところが26年の間エホバの証人として活発に行動した期間の終わる頃、その信頼の間違いを示す兆しが次第に明白になってきたのである。年代計算に関する事実が、たとえ組織の独特な主張と主要な教えの或る部分に致命的な結果になるとしても組織の指導者が事実と正直に向き合うことを、私は最後まで望んでいた。しかし協会の指導者たちは結局のところ何百万の人々を欺くに等しい事柄を一明らかに組織の方針のもと即ち「宗規」の上から一そのままにしておく事に決めた。好ましくないと見なした、そして今でもそう考えている情報を抑圧することによってそうしたのである。ようやくその事を悟った時、私の研究結果を出版する以外に開かれた道は無いと思われた。真実に関心を抱く人各自が証拠を吟味して自分自身の結論を引き出す機会をこうして得ることが出来る。

自分が知る事柄に対して人はそれぞれに責任がある。人生で置かれている状況を正しく理解するために他の人が必要とする情報—それも自分たちの宗教指導者から与えられずにいる情報—を持っているならば、黙っているのは道義的に悪いことである。真実を知りたいと望む人がその情報を得られるようにするのは義務と言える。これが本書を出版するに至った理由である。

### ものみの塔協会（Watchtower Society）の教えにおける年代計算の役割

ものみの塔協会の主張と教えの中で年代計算の果たしている中心的な役割を十分に知る人は、極めて少ない。エホバの証人でさえ、その多くは自分たちが戸ごとにのべ伝えている音信がものみの塔協会の年代計算（年表）と切っても切れない関係にあることに十分気づいている訳ではない。その年代計算に反する多くの証拠に直面しても、それは考えなくてもよい事だと言っ

て過小視する人もいる。「年代計算はどうせ大事ではない」がその言い分である。その問題は全く話したくないと言う人もいる。ではものみの塔の組織にとって、年代計算はどれほど重要なのだろうか。

証拠を調べるならば明らかなように、それはこの運動の主張と音信の正に根幹をなすものである。

ものみの塔協会 (Watchtower Society) は地上における神の「唯一の経路」であり、「代弁者」であると主張している。その最も独特な教えを要約すれば、神の王国は1914年に天で建てられた・「終わりの日」がその年に始まった・その時キリストは見えない様で再臨してキリスト教の諸宗派を「調べ」、ものみの塔協会 (Watch Tower Society) および協同する法人組織を除く諸宗派すべてを最終的に退けた・ものみの塔協会 (Watch Tower Society) は地上において用いられる唯一の「器」として1919年キリストにより任命されたとの主張である。

およそ70年ものあいだ協会はマタイ24:34にあるイエスの言葉「この世代」を用いて、「ハルマゲドンの戦い」で最終的な終わりが来るまでこの世代は決して過ぎ去らないと確言し、はっきり教えていた。その戦いでもものみの塔の活発なメンバー以外の人間は一人残らず永久に滅ぼされるのである。「1914年の世代」に属する何千人のエホバの証人は生きて世の終わりの日を見、生き残って地上の楽園で永遠に生きると心から思っていた。

何十年も経過して1914年がますます過去に遠ざかるにつれて、この主張は擁護するのが次第に困難となる。80年が過ぎてしまった後になると、この主張は文字通り、ばかげた話である。そこで *Watch Tower* 1995年11月1日号 (10-21頁) [ものみの塔1995年11月1日号10-21頁] の誌上で、「この世代」の語句に新しい定義が採用された。1914年の日付を世代の起算点として両者を「結びつけるのを止めた」のである。重大なこの変更にもかかわらず、1914年の日付は保持された—全くのところ、そうする他はなかった。そうしなければキリストの「再臨在」、「終わりの時」の始まり、キリストに用いられる特別な組織また地上における神の唯一の経路としての任命に関する主要な教義が成り立たないからである。この度は「この世代」が(特定の起算点のある)区切られた期間ではなく、時代の特異性によって定義されるとはいえ、新しい

定義には尚1914年を含めることが可能である。恣意的に加えられた要素を定義に含めることによって、このことが為された。すなわち「この世代」とは「キリストの臨在のしるしを見ても自分たちの道を改めずに滅びることになる人々」のことである。「キリストの臨在のしるし」は1914年以降見えるというのが以前と同様に公式の教えであるから、この日付が「この世代」の定義の重要な部分であることに変わりはない。

故にこの要素すべては1914年がものみの塔協会（Watch Tower Society）の教えの中で極めて重要な役割を果たしていることの証である。この日付そのものは聖書のどこにも記されていない。ではその元は何か。

この日付は年代計算の産物である。すなわちルカ21:24でイエスが言及された「異邦人の時」は紀元前607年に始まって西暦1914年に終わる2,520年の期間に相当するとされる。<sup>1)</sup> この計算はものみの塔運動の主要なメッセージの正に根幹である。キリスト教の福音－王国の「良いたより」（マタイ24:14）もこの年代計算と密接に関連すると主張されている。従って他の宗派のクリスチャンが伝えてきたのは、決して本物の福音ではなかったことになる。1981年8月1日号ものみの塔17頁に次の記述がある。

キリスト教世界の様々な宗教組織が幾世紀にもわたって行ってきた王国の福音伝道の業と、第一次世界大戦が終わった1918年以降エホバの証人が行ってきた宣べ伝える業とを、正直な心を持つ人に比較させましょう。それらは、一つの、同類のものではありません。エホバの証人が宣べ伝えているのは、真の“福音”つまり「良いたより」です。それは異邦人の時が終わった1914年にみ子イエス キリストが即位することによって設立された神の王国に関するものだからです（下線は筆者）

これと一致して1982年8月1日号ものみの塔 には「地上のあらゆる宗教のうち、地に住む人々にこの「良いたより」を伝えているのは、今日、エホバの証人だけです」と述べられている。（10頁）エホバの証人で協会の教えの中における年代計算の役割を軽く考える人は、ものみの塔運動の主要なメッセージを著しく損ねているだけである。このように「軽視」することは

ものみの塔（Watch Tower）の指導者たちに認められていない。認めるどころか、ものみの塔1983年4月1日号12頁はこう強調している：「1914年の後半に異邦人の時が終わったということは、王国に関する基本的な真理の一つとして、依然歴史的な根拠の上にしっかりと立っているものであり、わたしたちは今日それをしっかりと守らねばなりません」<sup>2)</sup>

1914年を指し示す年代計算を退けるならば由々しい結果を伴う罪を犯すことになる。これがものみの塔協会（Watch Tower Society）の見解であり、それは厳然たる事実である。異邦人の時の終わりである1914年に神の王国が設立されたということは「最も重要な出来事」であり、それと比べれば「他のどんな事も重要性が薄らぎます」と述べられている。<sup>3)</sup> この年代計算を受け入れない人々は、神の怒りを買うとされている。その最たる者が「キリスト教世界の僧職者」と信徒であり、彼らは「目前に迫った“大艱難”で滅びる」のである。<sup>4)</sup> エホバの証人のメンバーでこの年代計算を公然と疑問視する、あるいは放棄する人は非常に厳しい扱いを受けるおそれがある。後悔して考え直すのでなければ排斥され、「死に際して～ゲハナに行く」、将来に復活の希望のない悪しき「背教者たち」の部類とされる。<sup>5)</sup> 神、聖書そしてイエス キリストを今なお信じていても、それは問題ではない。ものみの塔誌の一読者が書き送った次の質問に対して協会はなканずく次のように回答している。「依然として神と聖書とイエス キリストを信じていると唱える一部の人を、エホバの証人が背教のかどで排斥（破門）してきたのはなぜですか」

エホバの証人と是認された交わりを持つには、聖書の教え全体を受け入れていることが求められます。その中には、エホバの証人だけが信じている聖書的な信条も含まれます。そうした信条にはどのようなものがありますか。  
～ 1914年は異邦人の時の終わりと天における神の王国の設立、さらには予告されたキリストの臨在を印づける年になった。（下線は筆者）<sup>6)</sup>

それゆえ1914年に「異邦人の時」が終わったという計算を否認する人を、協会はだれでもエホバの証人の一人とは認めない。全くのところ協会の年代

計算を密かに放棄し、従って表向きはエホバの証人の一人と見なされていても、ものみの塔協会の肝要なメッセージを事実上、退けている訳であるから、組織独自の基準に従えば最早この運動の一端を担ってはいないのが実際である。

## この研究を始めた経緯

それでこの基本的な予言的計算の正しさを疑問視するのは、エホバの証人にとってそう安易に出来ることではない。ものみ塔のように閉鎖的な宗教組織の場合は特に、教義の構造がある種の「要塞」の役目を果たし、多くの信者はその中に精神的また情緒的な安心を求める。教義の組み立ての或る部分が疑問視されると、感情的に反応し易い；自分たちの「要塞」が攻撃され、安全を脅かされていると感じて身構える。この防御の仕組みのため、耳を傾け、事の論議を客観的に調べるのが難しい。自分で気づかないうちに真実を重ねずるよりも、必要とする情緒の安全を優先してしまう。

エホバの証人に有り勝ちなこのように身構えた人と話し合うのは、聞く耳を持ち、心を開いた人と話すような訳にはいかない。「異邦人の時」の年代計算のように根本的な教義が問題になっている場合は特にそうである。これを問題にするのは、エホバの証人の教義体系の正に根幹を揺るがすことであるから、どのレベルのエホバの証人でもけんか腰で弁明することが多い。私は本書の資料をエホバの証人の統治体に初めて提出した1977年以降このような反応を何度も経験している。

この問題の研究の発端は1968年にさかのぼる。その当時わたしはエホバの証人の「開拓者」すなわち全時間の福音伝道者であった。その生活の中で私から聖書を教わっていた一人の男の人が異議を唱えた。バビロニア人によるエルサレム滅亡の年を紀元前607年とするものみの塔協会の教えの正当性を証明してもらいたいと言う。そしてすべての歴史学者はおよそ20年遅い紀元前587年または586年をその出来事の起きた年としていることを指摘した。私もそれは十分承知していたが、歴史学者がその日付のほうを選んでいる理由を、その人は知りたかったのである。私も他のエホバの証人同様、ものみの塔協会がエルサレム滅亡の年を紀元前607年に位置づけているのは聖書的な



根拠に依るもので、それゆえ世俗の資料に左右されないと思っていたが、それでも問題の調査をその人に約束した。

その結果とり組んだ調査と研究は思っていた以上に徹底的で広範囲に及ぶものとなり、間を置いて1968年から1975年末までの数年間にわたって続けられた。その時までには紀元前607年の日付に不利な証拠の重みは増し加わり、Watch Tower Societyは間違っていると不本意ながらも結論せざるを得なかったのである。

それ故1975年後のある期間、学究肌の親しい友人数人と証拠を話し合ったが、蒐集したデータに反証できた者は一人としていなかったのもので、問題の全体を扱った論文をニューヨーク市ブルックリンのWatchtower Society本部に送ることに決め、筋道を立てて書きまとめた論文の執筆に取りかかった。

作成された論文は1977年にエホバの証人の統治体に送付された。その資料に基づく著作は1981年に加筆、修正され1983年に第1版として出版された。1983年以降の年月の間、この問題に関連のある新発見や報告が数多く為された。その中で最重要なものは直近の二つの版に採り入れられている。第1版に提示された、紀元前607年の日付に反する7通りの証拠がこの度2倍以上に増えているのはその例である。

### **Watchtower 本部との文通**

1977年この研究に関して統治体との文通が始まった。提示された証拠に反論し得ないことは直ぐに明白となった。事実、反論を試みることも、為されたのは1980年2月になってからである。しかしそれまでの間にも研究の結果を他者に教えないようにと繰り返し警告された。例えば1978年1月17日付の統治体の書信はその一例である：

しかしこの見解を裏付ける論議がいかに強力であろうと、今のところそれはあなたの個人的な見解と見なされねばなりません。会衆の他の成員の間で話題にするとか、広めたりするべき事ではないのです。<sup>7)</sup>

更に1980年5月15日付の書信には以下の文言がある：

年代計算に関して**協会**が公にしたものとは異なる見解や結論を話すならば、兄弟たちの間に由々しい疑念や問題を引き起こします。それが穏当でないことをご承知なのは確かだと思います。<sup>8)</sup>

その助言は受け入れられた。Watch Tower本部の霊的兄弟たちは問題全体を徹底的に調べるために時間を必要としているという印象を与えられていたからである。論文に応じた1977年8月19日付の最初の手紙の中にこう書かれている：

他に急を要する事柄に追われているため、今の所この資料を検討する時間がありません。しかし機会のあり次第この資料を調べます～あなたの見解は責任を果たしうる兄弟たちの手で調べるのでご安心ください～しかるべき時にあなたの論文を検討して内容を評価いたします。

この類いの言質から判断して、ブルックリン本部に勤務する Watch Tower の役員は提出されたデータを誠実かつ客観的に吟味する用意があるものと思われた。ところが程なくして事態は全く異なる方向に進展することになる。

### 審問と中傷

1978年8月初め統治体の成員アルバート D シュローダーはヨーロッパ諸国の Watch Tower 支部代表者との会合を開いた。この会合において話されたのは、**協会**の年代計算である紀元前607年－西暦1914年を覆そうとするキャンペーンが組織の内と外の両側で進行しているという事であった。<sup>9)</sup> しかし協会はその年表を放棄するつもりが全く無いと述べられた。

3週間後の9月2日スウェーデンにおいて Watch Tower Society を代表する同国の地域監督二人の中の一人 Rolf Svensson と巡回監督 Hasse Hulth 二人の前の審問に呼び出された。聴聞会は**協会**の支部からの指示によるもので、それはブルックリン本部の「兄弟たち」が私の論文のことを憂慮しているためであるという。蒐集した情報を広めてはならないと、ここでも再び警告され

た。更に Rolf Svensson はエホバの証人個人がこの類いの調査や研究をすることを協会は必要とせず望んでもいないと告げた。

この会合の結果でもあるが、私は地元のエホバの証人の会衆での長老の立場また巡回区での務めや割り当てを一切辞任することにした。この立場を採った誠意のある理由を地元の長老団と巡回監督 Hasse Hulth に宛てた長い手紙で知らせてある。私が**協会**の年代計算を拒絶したことは、程なくしてスウェーデン各地のエホバの証人の兄弟たちの間で知られるようになる。

私だけでなく年代計算に疑いを抱いた他の人々はその後何カ月にもわたって私的に、また王国会館（会衆の集会場）の壇の上から、更にエホバの証人の大会において非難されるようになった。「反逆的」「僭越」「偽りの予言者」「自分勝手につまらない年表を作り上げた小予言者」「異端」など最大限に否定的な言葉で公に白眼視された。「会衆内の危険分子」「悪しき奴隷」「冒読者」「不道徳で不法な者」呼ばわりされた。Watch Tower Society の旅行する代表者の何人かをはじめ、我々の兄弟であるエホバの証人の或る人々からは、「悪霊に憑かれている」「**協会**に非難を浴びせた」「とっくに排斥されるはず」などと内々にほめかされた。これらは広がった中傷の僅かな例にすぎない。明らかに法的な理由で名前が公にされたことはないものの、中傷はその後ずっと続いている。

このような明白な中傷は単に地域的な現象ではなく、エホバの証人の統治体がそれを是認していることは *The Watchtower* (もののみの塔誌) に同様な記事が載せられている事実から明らかである。<sup>10)</sup>

起きた事態をここに述べたのはエホバの証人個人を批判するためではない。これらの人々はたいいてい親切であり、心から信仰している。序文の中で先に書いた理性のない感情的な反応に我知らず陥ることが個人として如何に容易かを示す例として述べたのである。1978年12月6日付アルバート シュローダー宛ての書信で、論文は最大の思慮を以て書かれ、誠意を込めて**協会**に送付されたにもかかわらず、陰口、中傷と人身攻撃の被害を受けた悲しむべき事実注意到を促し、事態の新たな成り行きを伝えた：

ですから事態のこのような成り行きは正に悲劇的です。提起された問題――

紀元前607年の真実性—から注意がそらされて、問題を提起した人が注目の的となり—問題ではなく人物—が問題視されているのです！ 我々の活動の場面でこの類いの事態が起きることなどあり得るのでしょうか。

この疑問に対して**協会**から正式な回答は受け取っていないが、答えはH. Dale Baumbach博士の言う心理的防御メカニズムにある：

不安に襲われる人は不安をかき立てる問題に直面すると、不安の原因となっているものを本能的に押し潰すか、さもなければそれを心の奥底へ押しやってしまう。<sup>11)</sup>

エホバの証人と交わりを持つ読者の方は、この防御メカニズムに気づくことで心を開き、本書に提示されて証拠を虚心に調べて頂ければ幸いである。

結局のところ Watch Tower Societyが紀元前607年に不利な証拠に反論を試みたのは、送付された論文の内容に対する回答を求め、筆者が今なお待たされていることを伝える手紙がスウェーデンにおける統治体の特別代表者によって統治体に送られた後の事であった。この代表者はスウェーデンにおいて協会の業務を調整する Bengt Hanson である。

1979年12月11日 Hanson の訪問を受けて事態の成り行きが話し合われたが、その中で明確にされたのは、真の問題点は**協会**に提出された、紀元前607年に不利な証拠であり—わたし個人、私の動機や態度—ではないという事である。紀元前607年に反する証拠が確かならば組織内のエホバの証人の誰にでも等しく関係がある事柄であって、このような事情からすれば他の証人たちにおけると同様それはわたし個人の態度や動機の問題ではない。

その結果1980年初めに Hanson は事情を説明した手紙を統治体に送り、年代計算に異を立てて提示された証拠がなお返事待ちであることを伝えた。こうして研究の資料が送付された殆ど3年後の1980年2月28日付の手紙で質問者ではなく質問に取り組むことがようやく為された。

しかし述べられた論議の大部分は Watch Tower Society の出版物の様々な箇

所で今までに述べられており、不満足なことは論文のなかで既に論証されているものであることが判明した。1980年3月31日付の書信でその論議に應對すると共に紀元前607年に反する証拠2点が新たに加えられた。こうしてWatch Tower Societyは自らの立場を擁護することに失敗したのみならず、それに反する証拠は更に強力になったと言える。

これ以後、問題に全面的に対処する最初の試みは1981年夏のことで、書籍「王国が来ますように」の付録（186-189頁）に簡単な論議が載せられた。最新のこの論議にはそれまでのものと比べて何ら新しい点はない。古代史の年表に精通した人から見れば、事実を隠すことによって、擁護できない持論を救おうとする弱々しい企てに過ぎないものと映るであろう。本書の最後の章「証拠を覆そうとする企て」は、その事を明白に示している。ともあれWatch Tower Societyの「付録」は、この組織の指導者たちには基本的教義の伝統よりも真実の方を重んずるつもりが毛頭ないことを私に確信させるに至った。

## エホバを俟つ

協会の役員たちは自らの年代計算を支持する論議を公に述べるのは全く自由であると考えて振る舞う一方、それに反する証拠の重さについてはエホバの証人一般を無知に留めておくことに極端である。それで紀元前607年に不利な証拠を他に漏らしてはならないと繰り返し警告しただけでなく、組織の年代計算を疑問視するエホバの証人を誰彼となく中傷することが広まるのを支持してきた。物事のこのような遣り方は、年代計算を疑問視する人に対して公正でないのみならずエホバの証人一般に対して甚だしく不公正である。論争の両方の言い分を聞き、すべての事実を知る権利がある。「異邦人の時再考」を出版することに決めたのはこの理由による。

興味深いことだがWatch Tower Societyの代表者は、教えに反する事実や証拠をエホバの証人に教えるべきではないとの立場を正当化するために様々な論議を展開してきた。論法の一つを挙げると：「自分のすべての持ち物をつかさどらせる」ためにキリストによって任命された「忠実で思慮深い奴隷」を通してエホバは真理を徐々に明らかにされる。（マタイ24：46、新世界訳）

この「奴隷」の意思はWatch Towerの印刷物の執筆と出版を監督する人々を通して表明される。故に我々はエホバを俟つ—言い換えれば組織が「新しい真理」を公にするまで待つべきである。誰でも組織より「先走る」者は「忠実で思慮深い奴隷」よりも自分の方が良く知っていると考えている訳であり、「僭越」である。

しかしこのような論法は聖書年表に関する協会の想定が間違っていた場合、根拠が薄弱である。どのように？ マタイ24:45-47の喩えの中で「主人」であるキリストが「自分のすべての持ち物の上に」任命した「忠実で思慮深い奴隷」を現在、見分け得るという考え自体、「主人」が1914年に到着し、数年後の1919年にそのような任命をしたとの年代計算に疑いの余地なく依拠しているからである。本書の示すとおりの、異邦人の時が1914年に終わったのではないとすれば、その年にキリストが再び来られたという主張の根拠は無くなり、Watch Towerの指導者たちは1919年「すべての持ち物の上に」任命されたと主張できない。そうとすれば、「真理」を公表する独占権を神から与えられているとの主張も正当なものではない。

また次のことにも留意すべきである。すなわち到着した時、「忠実な思慮深い奴隷」は誰かを決めるのは喩えにある「主人」であって奴隷自身ではない。個人のグループが—「主人」を差し置いて—「忠実で思慮深い奴隷」であると主張して主人の「持ち物」すべての上に自分たちを高めるのは、それこそ甚だしく僭越である。他方Watch Tower Societyの教えの或部分と矛盾する情報をたとえ公にしたとしても、偉ぶった態度をとらない個人が僭越であるとは言い難い。

「エホバを俟つ」のはクリスチャンすべてにとって当然の義務である。残念なことにWatch Tower Bible and Tract Societyは他の終末論運動の多くと同様、神の預言の成就する時が到来したと何度も「宣言」してきた。その度に神ご自身の成就の「時と季節」を無視したのである。1870年代の初頭からいつもそうしてきた。

Watch Tower運動の指導者はキリストが1874年に見えない様で来られたという教えをおよそ55年の間（1876－1931）口説いていた。それは「エホバを俟つ」手本なのだろうか。

またキリストの教会の「残れる者」が変えられる（テサロニケ第1 4:17）年として最初は1878年、その後1881年、1914年、1915年、1918年そして1925年であると次々に教えた。これは「エホバを俟つ」ことだろうか。<sup>12)</sup>

現存する事物の体制の終わりが来る年として最初は1914年、次いで1918-20年、次に1925年、その後1941-1942年頃、そしてこの度は1975年頃が教えられてきた。「エホバを俟つ」ことをしたのだろうか。<sup>13)</sup>

Watch Tower Societyが今なお維持している1914年が「異邦人の時」の終わる年でないとするれば、その年に由来する現今の数多い「預言的」な適用をする協会には「エホバを俟つ」用意が未だない更なる証拠である。それに照らせば、またそのような状況の下で他の人々に「エホバを俟つ」ことを助言するのはいささかの外れであろう。エホバを俟つことを心から望む人はWatch Tower Societyの指導者が喜んでその事をする迄ただ待つ訳にはいかない。

Watch Tower Societyがその年代計算の枠組みの中で作り上げたのは現代における聖書預言の明らかに独断的な「成就」である。証拠を慎重に検討した上でその結論に達したならば、自分だけの勝手な考えを信ずるべきものとして他の人々に「押しつける」企てを否認する必要がある。そうするとき初めて「エホバを俟つ」ようになったと本当に言える。

## 追放

1 世紀以上のあいだWatch Towerの出版物にはキリスト教の他宗派に対して誤りと悪を批判する記事が絶えず大量に載せられてきた。多くの場合この批判が十把一絡げで皮相的であるにしても、的を射ることもまれではない。過去において諸教会が意見の違うメンバーに示した偏狭は、Watch Towerの文書の中で少なからず非難されている。1987年7月15日号ものみ塔28頁に「キリスト教世界には、政治的な抗議のために焼身自殺をする人から、宗教上の見解を異にする人々に対して狭量に振る舞う人まで様々な狂信者がいます」とある。この類いの狭量の恐るべき典型はローマカトリック教会によって13世紀に設立されて6 世紀以上も続いた異端審問所である。

「異端審問所」(Inquisition) の語は「調べること」を意味するラテン語 inquisitio に由来する。簡単に言えば「異端および背教者を発見して罰する

ためにローマカトリック教会が設置した裁判所」である。<sup>14)</sup> 偏狭な僧職者の支配下に置かれた人々の有様はどんなであったのか。1989年9月1日号のみ塔3頁はこう説明している：

自分勝手な崇拜をしたり、僧職者と対立する意見を述べたりすることは誰にも許されていませんでした。僧職者のこうした不寛容は、ヨーロッパ全土に恐れという風潮を生み出しました。教会は、あえて異なる意見を抱く者たちを根絶するために異端審問所を設けました。

このような言葉から Watch Tower Society は中世のローマカトリック教会とは対照的であり、「異なる宗教上の見解」を抱くメンバーに対して寛容を示し、組織の教えと一致しない意見を表明する権利を擁護するとの印象を受けるかもしれない。ところが真実を言えば、異なる宗教上の見解を抱くメンバーに対するこの組織の態度は中世のカトリック教会のそれと全く同じである。「自分自身の反対意見を押しだそうとする人には用心しなければなりません」との警告が1986年3月15日号のみ塔17頁に出されている。エホバの証人が「依然として神と聖書とイエス キリストを信じていると唱える人を背教のかどで排斥（破門）してきた」理由を問う質問に Watch Tower Society は次のように答えた：

そうした異議を口にする人々は、キリスト教と称する多くの宗教組織が異なる見解を許容していることを指摘します。～しかし、そのような例があるからと言って、わたしたちが同じようにする根拠にはなりません。～異なった、あるいは逸脱した見解を教えることは、真のキリスト教と相いれません。<sup>15)</sup>

Watch Tower Society は中世のローマカトリック教会が組織したのと同様な審理委員会を設けることさえしている。ただ違うのは協会の「審理委員会」は犠牲者を身体的に苦しめる法的な権威を与えられていないことである。事の起きる前に自発的に組織を去るのでない限り、自身が到達した結論が元で



このような「異端審問所」で裁かれ、追放されることは分かっていた。しかし何れの場合にしても、結果は同じことであるのも承知していた。

26年のあいだ活発なエホバの証人であった後、1982年の今わたしは Watch Tower の組織を去る覚悟を固めている。これが意味するのは、この年月のあいだ自分がその一部であった社会との決別であることははっきり分かっていた。Watch Tower Society の支配者は、排斥でも自発的な断絶でも、組織と断絶した人とはいっさい接触しないことをエホバの証人に要求している。それで事実上すべての友人だけでなく、組織の中にいる親族すべて（兄弟一人、姉妹二人と家族、いとこ及び家族など70人以上）を失うことも分かっていた。身体的な「処刑」は間近い「ハルマゲドンの戦い」まで延期されるにしても、「死んだ者」と見なされ、扱われるのである。**証人たちは組織と交わっていない人すべてをエホバがその戦いで滅ぼすことを予期している。**<sup>16)</sup>

この決別に対して心の用意をすべく私は暫く努力した。この宗教活動との別れを公に告げるものとして論文を出版する計画であった。しかし出版するための原稿が整わないうちに、Watch Tower Society のスウェーデン支部から1982年5月4日付の手紙が届いた。それは**協会**の代表者4人から成る「審理委員会」の審問への召還状で、4人は「我々の信条と組織に対するあなたの態度を見極めるために」任命されたと書かれていた。<sup>17)</sup>

組織内での余命はいくばくもない事、論文を予定通りに出版するのは難しいことが理解された。支部事務所への手紙を書いて、審理委員会を延期してもらうように努めた。委員たちも承知のとおり、「我々の信条と組織に対する」私の態度は協会の年代計算に反するとして提出された証拠に根ざしており、それを根拠としていること、改心させようと心から望んでいるならば、私の態度の根底にある証拠の吟味から手を付ける必要があることを指摘したのである。それで委員たちが問題の論文を徹底的に調べることができるよう配慮をお願いした。そうすれば当然のこと意義のある会合を持てるであろう。

しかし支部事務所も審理委員会の4人のメンバーも提案された形の議論に全く興味を示さず、意義のある会合を開くための条件に触れることさえもなかった。委員会の審理への召還を繰り返す短い手紙が来たに過ぎない。前

もってすでに裁かれており、召還された審理は無意味であり、薄気味悪い茶番であることが明らかと思われた。それゆえ審問には応じないことにした結果、欠席のまま裁かれて1982年6月9日に排斥されたのである。

時を稼ぐ試みとして排斥の決定は上訴され、4人の新しいメンバーから成る、いわゆる「上訴委員会」が設けられた。意味のある話し合いのために当然と考えられる条件を再び書き送ったが、返事はない。こうして1982年7月7日、見せかけの審理のために委員会が当人の欠席のまま開かれ、予想通り、最初の委員会の決定が確定された。両方の場合とも、考慮された唯一の「司法上の」論点は、Watch Towerの教えに全面的に同意するか、それとも同意しないかで、私の立場が正しいかどうかの問題は、無関係に過ぎない事柄として扱われた。

### この結論は信仰を破壊するか？

先に述べたように本書の中で到達した結論は、Watch Tower Societyの主要な主張と終末論的な解釈を台無しにするものと言える。故にこのような結論はエホバの証人の間に何らかの動揺を引き起こすかも知れず、**協会**の指導者は、それが広まることで信徒たちの一致が乱されるのを明らかに恐れている。私の努力の成果がWatch Towerの役員の目には信仰を破壊し、「真のクリスチャン会衆」の一致を乱すものと映るであろうことは承知している。

しかし信仰は真理、事実と正しく一致していなければならず、それには歴史上の事実も含まれる。故にこの問題に関する事実を公にすることが、真のクリスチャンの間の平和と一致を乱すとはいささかも思っていない。「愛は～結合の完全なきずな」である故に、真の一致は互いの愛に根ざす。—コロサイ 3:14 新世界訳

他方、愛ではなくて恐れに根ざす偽りの一致もある。組織の指導者によって強制された機械的な一致である。組織の指導者は権威を保ち、個人を支配することを望む。真理に基づく一致ではない。このような組織内の個人は自由に考え、語り、行動する自分たちの権利と責任を上層部の権威に譲り渡している。本書に書き記された証拠と結論はWatch Tower Societyの権威的な主張を覆すので、本書の出版は組織の内部で強制された一致を脅かすこと

になり得るであろう。しかし「御父と御子イエス・キリストとの交わり」を持つクリスチャン各人の愛に根ざす真の一致が影響されることは決してない。— ヨハネ17:21-23; ヨハネの手紙一 1:3 新共同訳

それゆえ Watch Tower Societyの預言的な主張と解釈に根拠が無いことがたとえ判明しても、それらのものが消滅し、無くなる時に真に価値のあるものが失われることはない。クリスチャンにはなお真理と希望の真の源である**神の言葉**がある。キリストはなお主であり、将来の命の唯一の希望である。そして御父、イエス・キリスト、この地で真の兄弟、姉妹となる人々とのクリスチャン平和と一致をなお享受するであろう。真実であると自らが明確に理解した事柄を受け入れた故に権威主義的な宗教組織から追放されようとも、キリストはその人を見捨てない。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」と言われたからである。(ヨハネ 9:30,34-39; マタイ 18:20 新共同訳)

「組織を離れてどこへ行きますようか」との問いに対する答えは、使徒ペテロが次のように言った時と今も同じである：「主よ、わたしたちはだれのところに行けばよいというのでしょうか。あなたは永遠の命のことばを持っておられます。」(ヨハネ 6:68)「永遠の命の言葉を持つ」のはキリストである。何かの組織ではない。<sup>18)</sup>

この研究を始めて以来の年月の間、個人的に、あるいは文通によって Watch Tower の組織の異なるレベルのエホバの証人を大勢知るようになった。その人数は増えつつある。それらの方々は年代計算の問題を徹底的に調べ、本書に示されたと同じ結論にそれぞれ到達した。**協会**の年代計算を擁護しようと努力を重ねたものの、聖書と歴史の証拠ゆえに**協会**の年表をやむなく放棄した人もいて、その中には協会の聖書事典 Aid to Bible Understanding の執筆に携わった人たちもいる。この事典の322-348頁 chronology の項は、この組織が今までに公にした Watch Tower chronology の中で今なお最も徹底した立派な論議である。<sup>19)</sup>とは言えこの記事の執筆者はバビロニア人によるエルサレム滅亡を紀元前607年に位置づける**協会**の日付は結局のところ擁護できないことを悟った。そのあと年代計算およびそれに基づく教えもろとも607年の日付を放棄するに至ったのである。私に宛てた手紙の中で次のように述べてい

る：

*Aid to Bible Understanding*: chronologyの項を作成するにあたってネブカデネザルの父ナボポラッサルからナボニダスおよびバビロン滅亡に至る新バビロニア帝国の時代は難問でした。ネブカデネザル第18年におけるエルサレム滅亡の年として紀元前607年を裏付ける証拠を、たとえどんなに小さくても発見して提示することはエホバの証人である私共にとって当然の関心事です。歴史学者が一貫しておよそ20年後の日付を指摘しており、ネブカデネザルの治世の初めを、Watch Towerの文書に使われている紀元前625年ではなく紀元前605年（即位年）に位置づけていることは、私もとうに気が付いていました。ダニエル書第4章の「七つの時」が1914年を指し示すという**協会**の解釈に紀元前607年の日付が必須であることも承知していました。

調査に多大の労力が費やされました。当時（1968年）Watch Tower本部職員 Charles Plloegerが私の助手となり、エルサレム滅亡の日付として紀元前607年の日付を幾らかでも裏付け得る情報源を求めて何週間もニューヨーク市の図書館をくまなく巡りました。また私たちは新バビロニアおよび前後の時代に関わる天文テキストの専門家であるブラウン大学のA. J. Sachs教授を訪ねてインタビューを行いました。この努力をしても、紀元前607年の日付を裏付けるどんな証拠も得られていません。

この事を考慮して、‘chronology’の記述をする際には古代史の資料に存在する不確実性を示すことに努め、そのためにかなりの頁を充てています。バビロニアだけでなくエジプト、アッシリアおよびメディア-ペルシャの資料も含まれます。この不確実性に関する多くの項目には根拠があると今でも思いますが、その論議が実際には歴史上の証拠が無い日付を擁護したい願望から生まれたことは確かです。歴史上の証拠と聖書の明白な記述が事実上、矛盾するならば、信頼性が高いのは聖書の方であって聖書に付き従うことにやぶさかではありません。しかし問題は聖書の明白な記述との矛盾ではなく、聖書自体には書かれていない意味を聖書の一部分に意味づけた**解釈**との矛盾であることに間違いあ

りません。このような人間の解釈に見いだされ得る不確実性は、古代史の年代記述に見いだされる不確実性と確かに同じ類いのものです。<sup>20)</sup>

## 謝辞

序文を終えるにあたり、励み、提言、批評また質問によってこの論文に大きく貢献してくださった世界各国の博識ある方々にお礼を申し上げたい。中には論文の執筆当時なお活発なエホバの証人であった方もおられた。なかんずく初期の段階からこの事業に参画し、様々な面でご助力いただいたスウェーデン Ljungbyhed の Rud Persson 氏の名を挙げねばならない。同じ背景の他の友人とくに James Penton, Raymond Franz 両氏には本書の出版に際して英文および文法の仕上げる面で大きく助けていただいた。

特殊な歴史の部分（第1章）に関してスウェーデンの学究 Ingemar Linden 博士は小生の興味を喚起してこの分野研究の端緒を開いてくださった。Oregon 州 Beaverton（現在コロラド州 Fort Collins）の Alan Feuerbacher 氏からはこの分野の重要な文献を提供して頂いている。新バビロニア年表に関する章（第3章、第4章）ではバビロニア楔形文字テキストの權威との接触が非常に貴重な助けとなった。新バビロニア時代の指導的な權威である英国の D. J. Wiseman 教授；ロンドン大英博物館古代近東部門の管理者代理 C. B. F. Walker 氏；米国の Abraham J. Sachs 教授；1983年 Abraham Sachs 教授の没後バビロニア天文観測テキストの指導的専門家オーストリアの Hermann Hunger 教授；カナダ トロントの John M. Steele 博士およびパリ ルーブル美術館の Béatrice André 博士の名を挙げることが出来る。最後に評釈の部分（5-7章）については多数の有能な言語学者、ヘブライ語学者の好意によって専門的知識にあずかることが出来た。とりわけスウェーデン Västerås の Seth Erlandsson 博士；共にノルウェー オスロの Tor Maganus Amble, Hans M. Barstad 両博士；スイス バーゼルの Ernst Jenni 教授の名が挙げられる。

しかし何よりも先ず感謝は聖書の神すなわち旧約聖書においてモーゼの時代以降ヤーウェすなわちエホバと言う固有の名を保ち、新約聖書においては**天にいます我らの父**として我々が出会い、近づくことの出来る神に捧げられる。研究は神の助けと理解を絶えず祈り求めながら行われたからである。こ

の研究の根本は**神の真理のことば**であるから、すべての誉れは神に帰せられる。たとえ何かの宗教理論や解釈が擁護できないものと判明し、それゆえに拒否しなければならないとしても、**神の預言の言葉**は、論議された主題に関して行われた聖書また歴史の研究を通して繰り返し何度も確証された。信仰を強めるこの経験は筆者にとって永続する真の祝福となっている。読者諸氏が同様に祝福されることを願ってやまない。

カール オロフ ヨンソン  
スウェーデン ヨーテボリ 1982年  
1998年、2004年 改訂

## 注

- 1 . B.C.E.一紀元前 C.E. - 西暦
- 2 . 下線と太字は筆者。1979年11月17日 Watch Tower Societyの元副会長 Frederick W. Franzは本部家族の聖書討議において1914年の重要性をことさらに強調して述べた：「我々が**協会**として存在する唯一の目的は1914年に建てられた**王国**をふれ告げ、大いなるバビロンが倒れたとの警告を鳴り響かせることです。我々には特別な知らせがあります」(Raymond Franz, *In Search of Christian Freedom*, Atlanta: Commentary Press, 1991, pp. 32, 33)
- 3 . 1988年1月1日号 **ものみの塔** 10, 11頁
- 4 . 1985年9月1日号 **ものみの塔** 24, 25頁
- 5 . 1982年4月1日号 **ものみの塔** 27頁 / 1992年7月15日号**ものみの塔** 12頁によれば、意見を異にするこのような人は「エホバを激しく憎んでいる」「**神の敵**」である。それゆえ**証人**たちは「憎しみの限りをつくして彼らを憎む」ように促されている。この勧告は1993年10月1日号**ものみの塔** 19頁で繰り返されており、「背教者」は「その悪が非常に深く自分の中にし

み込み、切り離せない自分の気質の一部となってしまう」とある。証人たちは、詩編作者ダビデの祈りに倣って「ああ、神よ、あなたが邪悪なものを打ち殺してください」と、彼らを殺すことを神に求めるようにとさえ告げられている。組織の元メンバーに対してこのような恨みのある攻撃を加えるのは、山上の垂訓でイエスが勧めた態度とは全く正反対である。－マタイ 5:43-48

6. 1986年4月1日号のみの塔 30, 31
7. Watch Tower Societyからの手紙に個人の署名は無く、代わりに内部専用のシンボルが使用されている。この手紙の上部左の” GEA” の示す執筆者は統治体のメンバー Lloyd Barryである。
8. “EF” のシンボルはこの手紙の執筆者が執筆部門の Fred Ruskであることを示している。
9. 組織内部からのものである筆者の論文以外にも、Schroederの念頭には **協会**の年代計算を外部から批判した2冊の本があったとも思われる：*The Jehovah's Witnesses and Prophetic Speculation*, by Edmund C. Gruss (Nurtly, N. J.: Presbyterian and Reformed Publishing Co., 1972), and *1914 and Christ's Second Coming* by William MacCarty (Washington, D.C.: Review and Herald Publishing Association, 1975).
10. 紀元前607年―西暦1914年の計算を放棄することは、それに基づく解釈、たとえば神の王国が1914年に建てられたこと、またキリストの「見えない臨在」がその年に始まった等の解釈の放棄をも意味する。このような見解を受け入れる事が出来ないエホバの証人について1979年7月15日号のみの塔13頁に次の記述がある：「不法の者たちは、わたしたちの主の『約束された臨在』はこの時代にあるのではないと主張して、真のクリスチャン会衆に入り込もうとしました。～ この種の人たちは、マタイ7章15-23節に記録されている、イエスが警告した人々の中に含まれます。『羊のおおいをかぶってあなた方の元に来る偽善者たちに警戒してください。内側では、彼らはむさぼり食うおおかみです。～ [その日には] わたしは彼らにはっきり言います、わたしは未だあなたがたを知らない、不法を働く者たちよ、わたしから離れ去れ、と』」更に1980年11月1日号のみの塔19頁に次の記述がある：「ベテロは、クリスチャン会衆内で『あざける者』となる人物により『連れ去られる』危険についても語っていたのです。そのような者たちは、キリストの『臨在』に関する預言の成就を軽んじ、『忠実で思慮深い奴隷』や、クリスチャン会衆の統治体や任命された長老たちに対して無法な態度を取ります」[下線は筆者] 同じ記事の11節と14節も参照。
11. *Spectrum*, Vol.11, No. 4, 1981, p. 63. (This journal was published by the Associations of Adventists Forums, Box 4330, Takoma, Park, Maryland, U.S.A.) このような

- 行動は「心を閉ざしている」しるしであって、同様な説明が1985年 2 月 22日号 目ざめよ！にある：「例えば、自分の宗教的な見解を擁護できないと、自分の信条に異議を唱える人に対して、筋の通った論議によってではなく、悪口や当てこすりによって痛烈な非難を浴びせていることに気づくかもしれません。これは幾らか偏見があり、心が閉ざされていることを示しています」（4 頁；1990年 5 月22日号 目ざめよ！ 4 頁とも比較）
12. *The Watch Tower*, February 1, 1916, p. 38; September 1, 1916, pp. 264, 265; July 1, 1920, p. 203.
  13. *The Time Is At Hand* (=Vol. 2 of the series *Studies in the Scriptures*, published in 1889), pp. 76-78; *The Finished Mystery* (=Vol. 7 of *Studies in the Scriptures*, published in 1917), pp. 129, 178, 404, 542; *Millions Now Living Will Never Die!* (1920), p. 97; *The Watchtower*, Sept. 9, 1941, p.288; *Awake!*, Oct. 8, 1966, pp. 19, 20; *The Watchtower*, May 1, 1968, pp. 271-272.
  14. The Swedish encyclopedia *Nordisk Familjebok*, Vol. 11 (Malmö: Förlagshuset Norden AB, 1953) p.35.
  15. 1986年 4 月 1 日号 ものみの塔 pp.30, 31
  16. 排斥（破門）の規定に関する記事は例えば1981年11月15日号 ものみの塔 15-31頁、1988年 4 月15日号 ものみの塔 27, 28頁にある。現存する世界体制の差し迫った滅びについては1989年 9 月 1 日号 ものみの塔 19頁に次の記述がある：「エホバの証人だけが、つまり至上の組織者の保護のもとで一つに結ばれた組織となっている、油そそがれた残りの者と『大群衆』の人々だけが、悪魔サタンの支配する、滅びに定められたこの体制の差し迫った終わりを生き残るという聖書的な希望を抱いています」（1988年 9 月15日号 ものみの塔 14, 15頁とも比較）
  17. この処置はニューヨーク ブルックリン本部の要請で執られたと思われる。1980年春まで統治体の成員であったRaymond Franzは後日1982年 8 月 7 日付の手紙で次のように書き送ってこられた：「あなたに対する協会の処置は多少とも既定の結論と思われます。私の場合、私がどんなに低姿勢であっても、私に対して何らかの事をするのは時間の問題に過ぎなかったようです。あなたの場合、ブルックリンに連絡した支部事務所が、処置を指示されたに違いありません」
  18. この聖句について Watch Tower Societyの解説は「永遠の命」を求めて誰のところに行くべきかの点でキリストを組織に置き換えている。例として1981年 5 月15日号19頁、1982年 3 月 1 日号 31頁 参照。
  19. *Aid to Bible Understanding* 全巻は1971年に出版された。幾らか改訂された版 2 巻が1988年に出ている。最も重要な新しい特色は視覚に訴えるカラーの図版（地図、絵、写真など）である。しかし事典の題名は *Insight on the*



*Scriptures*（聖書に対する洞察、1994年）に変えられた。3人の主要な著作者 Raymond Franz, Edward Dunlap, Reinhard Lengrat が1980年に本部を去ったこと、Franz と Dunlap の二人が意見の相違ゆえに排斥されたことが明らかにその理由である。“Chronology”の元の記事は大半が削除された。（see Vol. 1, pp.447-467）1977年本部に提出の論文に載せられた、この題目に関する情報また組織の主張の薄弱なことに対する認識が多分その理由である。

20. 1982年6月12日付のこの手紙は統治体の元メンバー Raymond Franz によって書かれた。

# 第1章

## 解釈の歴史

思想・信条にはすべて始まりがある。しかし、ある考えを信じてはいても、その考えの背景、起源や発展については全く知らない人も多い。その歴史を知らないために、真実でない考えを真実であると益々思い込むことさえある。他の場合にもあることだが、この無知は様々の狂信を生む温床である。

もちろん、ある考えの発展の歴史を知ることが、その考えの誤りを示す結果になるとは限らないが、考えが妥当かどうかを判断する上でその知識は大いに役立つ。ある考え——ここでは或る解釈——が無知のため、あいまいにされた明白な例は、ルカ21:24でキリストが言われた「異邦人の時代」に関するもので、多くの人に信じられている概念である：

人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれる。異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる。—— *新共同訳*

世界中の何百万人の人は、この預言的な言葉が20世紀の特定の年を間違いなく指し示し、且つ繋がりががあるという信仰を受け入れてきた。またその信仰に基づいて今を計画し、将来の希望を抱くことさえしている。その歴史とは何か。

### 1日を1年とする原則

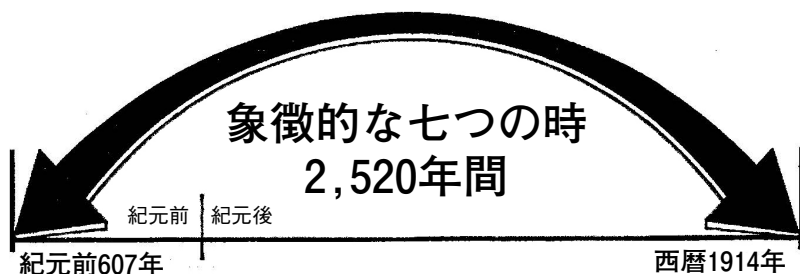
「異邦人の時代」（ものみの塔協会の新世界訳では「諸国民の定められた時」と言われる期間の長さは、ものみの塔協会を含め、一部の解説者によって2,520年と計算されてきた。この計算は、いわゆる「1日を1年とする原則」に基づいている。この原則によると、時に関連する聖書預言において1日は

常に1年を表わす。つまり「地図の上で、たとえば1インチが100 マイルを表わすのと同様である」<sup>1)</sup> 預言的な期間を明白にこの方法で数えた聖書の句は二つある：民数記14:34 とエゼキエル書 4:6。

最初の聖句では、イスラエル人は犯した罪の行いの罰として、スパイが土地を探った40日の日数に応じて40年のあいだ荒野をさまようことになる。「一日を一年とする」計算である。

2 番目の聖句でエゼキエルは、イスラエルとユダが罪を犯した年数、「各一年を一日として」左脇を下にして390日、右脇を下に40日のあいだ横たわることを命じられる。

しかし、これら特定の解釈は、聖書自体によって読者に与えられていることに注目すべきである。「一日を一年とする」(新共同訳) ことが、他の預言の期間にも適用される解釈の一般的な原則であるとは、どこにも述べられていない。日を年に数える原則が、時に関するどの聖書預言にもすべて当てはまるという考えが発展してきたのには、長い歴史がある。その歴史の中でこの原則の適用が移り変わる種類のものであった事からも、その信頼性には確かに何か問題があると言える。



紀元前607年、模型的な神の王国であったユダ王国は倒れ、異邦人の諸王国が全地を支配するようになった。西暦1914年、「諸国民の定められた時」は終わり、「世の王国」はキリストに与えられた。 目ざめよ！—1974年 1 月 8 日

1974年 1 月 8 日号「目ざめよ！」誌18頁からの抜粋  
「異邦人の時代」を紀元前607年から西暦1914年までの2,520年の期間とする計算は、ものみの塔協会が世界的に伝道している黙示録的な音信の年代面での根拠を成している。

## ユダヤ人の学者が用いた

先に挙げた二つの場合の他に、預言的な時の計算にこの方法を初めて用いたのはユダヤ人の律法博士（ラビ）であった。ダニエル 9:24-27の「七十週」に関してこの事が行われた。

第1節は次のとおりである：「あなたの民とあなたの聖なる都市に関して定められた七十週がある。これは、違犯を終結させ、罪を終わらせ、とがの贖いをし、定めのない時に至る義を携え入り、幻と預言者と共に証印を押し、聖の聖なる所に油をそそぐためである」<sup>2)</sup>

しかし実際のところ「日を年に数える」ことを一般的な原則として最初に述べたのは西暦1世紀の高名なラビ Akibah ben Joseph (c. 50-132 C.E.)<sup>3)</sup>である。

何百年もの歳月が流れ、9世紀初頭に至って初めてユダヤ人ラビの多くが、日を年にする原則を拡大してダニエル書の時の他の期間にも用い始めた。ダニエル 8:14の2,300の「夕と朝」、ダニエル12:11, 12の1,290日と1,335日がそれに含まれる。このすべてはメシアとの関連があるとされた預言である。

これらのラビの先頭を切って *Nahawendi* は、ダニエル 8:14の2,300の「夕と朝」を年数と考え、(彼が紀元前942年とした) シロの滅びから西暦1358年までの年数とした。この年にメシアが現れるのを、彼は期待した。<sup>4)</sup>

*Nahawendi* の直ぐ後には、同じ世紀の *Saadia ben Joseph*, 10世紀には *Solomon ben Jeroham* が続く。後者は、日を年にする原則をダニエル12:12の1,335日に適用した。彼はアレクサンドロス大王の時から起算して、西暦968年がイスラエルの救われる年であるとした。

高名なラビ、*Rashi* (1040-1105) は2,300日の年が西暦1352年に終わるとして、この年にメシアが現れると考えた。

*Abraham bar Hiyya Hanasi* (c. 1063-1136) は2,300-, 1,290-, 及び1,335-年の期間が、15世紀のそれぞれ異なる年に終わると推定した。例えば2,300日の年の終わりは西暦1468年に設定された。<sup>5)</sup>

19世紀に入って、なお他にも多くのユダヤ人の学者がメシアの現れる年を定めるため、日を年にする原則を使い続けていた。

日を年にする原則を適用するにあたって、ラビの学者がこれら10世紀の間に用いた方法は様々であり、その到達した日付も異なる。しかし一つだけ確かな事がある：ある年数が終わるとされた年は結局のところ、何事もなく過ぎたということである。

日を年にする原則の使用は、ユダヤ人の筋では西暦紀元の初めから比較的に普通であったので、これはキリスト教の解説者の間でも事情は同じだったのだろうか。

一層の興味を引くことだが、クリスチャン共同体においてそれが用いられた歴史 — また得られた結果 — は対照的なものか、それとも類似のパターンが踏襲されているだろうか。

## キリスト教解説者の間における「日を年にする原則」

すでに見たように、ラビ Akiba ben Joseph は、日を年にする方法を原則として既に西暦 1 世紀に提示した。しかしキリスト教の学者の間では、その後 1 千年のあいだ — 原則としての仕方 — この方法が適用された例を見ない。

事実、4 世紀以降に数人の解説者は黙示録の1,260日に神秘的または象徴的意味を付することを提案した。しかしながら、日を年にするルールが1,260日または他のどんな期間にも適用されたことは、12世紀以前には一度もない。唯一の例外は黙示録11:9の3½日で、この期間を3½年と解釈した解説者は多く、4世紀のVictorinusがその最初である。<sup>6)</sup> 無論のこと、これは日を年にするルールあるいは原則を厳密に適用したものとは言えない。

日を年にする原則をダニエル書と黙示録の様々な時の期間に初めて適用したキリスト教の解説者は、イタリアのCoraceにあるシトー修道会の修道院長Joachim of Floris (c. 1130-1202) に先ず間違いない。これは19世紀にCharles Maitlandによって指摘された。彼は多くの著作と論文の中で、この考えに反

論した主立った人物である。例えば、黙示録11:3の1,260日を1,260年と主張する人々に反論して、メートランドは徹底的に調べた上でこう結論づけた。1,260年の仕組みは「狂気じみた、かの僧院長が考え出して、1190年にこの世に持ち込むまでは、およそ聞いたことがない」<sup>7)</sup>

日を年にする原則を19世紀に信奉した多くの人は、この原則の新奇なことについてメートランドが述べた事柄に反論を試みたが、その一つたりとも成功しなかった。彼の反対者の中で最も学識豊かなE. B. エリオット師でさえも、入手できる資料すべての綿密な調査を尽くした後で、次のように認めざるを得なかった。「反キリストについてダニエル書と黙示録の預言にある日数は、最初の4世紀のあいだ、キリスト教教会の教父たちによって年数ではなく、文字通りの日数として解釈されていた」<sup>8)</sup> 日を年にする原則を黙示録11:13の1,260日に適用したクリスチャンの著述家はフロリスのヨアキムが最初であることに、メートランドはこうして図らずも同意することになった。彼はこう書いている：

12世紀の終わりに Joachim Abbas は、今見たとおり、それを大雑把に初めて試みた：その後14世紀にウィクリフ派の *Walter Brute* がこれに続いた。<sup>9)</sup>

ヨアキムは恐らくユダヤ教のラビの影響を受けており、1,260の「日数の年」をキリストの時から起算し、間もなく「霊の時代」になってそれは終わると信じていた。特定の日付が設定されていた訳ではないが、彼は西暦1260年を待ち望んでいたようだ。彼の死後、その年は「ヨアキムの追隨者によって、新しい時代の始まる重大な年と考えられるようになり、格別な出来事も無くその年が過ぎ去ると、彼の教説を一切信ずるのを止める人が出たほどであった」<sup>10)</sup>

解釈の新しい伝統すなわち「日を年にする原則」を預言解釈の文字通りの基礎とする伝統は、ヨアキムの著作を以てそのはじめとする。その後の世紀の間、キリストの再臨の年であるとして、数えきれないほどの日付が設定された。その大部分は日を年にする原則に基づいたものである。(16世紀の) 宗教改革の時にマルチン・ルーテルや他の改革者の大多数は、この原則を信じ

ていた。そしてずっと後の19世紀になってもプロテスタントの学者の間で一般に受け入れられた。

## この原則を異邦人の時に適用する

すでに見たとおり、フロリスのヨアキムは、日を年にする原則を黙示録11:3の1,260日に適用した。一つ前の節はこの期間を月の数に換算してこう述べている。「諸国民…は聖なる都市を四十二か月のあいだ踏みにじるであろう」(啓示11:2, 新世訳)「聖なる都市」についてのこの預言はルカ21:24のイエスの言葉「異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる」(新共同訳)ときわめて類似しているので、ヨアキムの追随者の中には1,260日はすなわち1,260年であるとして計算した期間を「異邦人の時代」と結びつけようとする人々が現れた。

しかし、黙示録11:2,3と12:6,14はキリスト教教会にかかわると信じられていたので、エルサレム即ち「聖なる都市」はローマカトリック教会であると一般に解釈された。<sup>11)</sup> 従って「異邦人の時代」は教会の苦難の期間を意味すると解釈され、苦難は西暦1260年に終ると初めは期待されていた。

しかし「聖なる都市」が実際のエルサレムの町であると信じる人々もいた。学究的な医師として有名な*Arnold of Villanova* (c. 1235-1313) は、ダニエル12:11の1,290日を1,290年に換算して、それが異邦人の時代であるとした。西暦70年にローマ人によってエルサレが破壊された後、ユダヤ人の捧げる犠牲が取り去られた時から数えて、彼は異邦人の時代が14世紀に終わるものと期待した。彼の時代は未だ十字軍の戦いが続いており、アーノルドは近い将来に満了が期待された異邦人の時代を十字軍と結びつけて、異邦人の時代が近く終わらない限り、「忠実な信徒たち」が聖地を異教徒から取り戻すことなど出来ようはずがないと論じた。<sup>12)</sup>

14世紀末になって、英国のジョン・ウィクリフの追随者の1人 *Walter Brute* は更に別の解釈を打ち出した。それによれば、「異邦人の時代」とはキリスト教教会が異教の儀式や慣習によって支配される時代である。この背教は西暦100年頃に最後の使徒が死んだ後に始まり、1,260年のあいだ続くと、

彼は主張した。この期間そして30年早い（西暦70年の）エルサレムの滅びから起算した1,290の「日数の年」もまた彼の時代には過ぎてしまっていた。彼は次のように書いている：

年代記をひもとく人は誰でも次のことを見出すであろう。エルサレムの滅びが完全に終わった後、また聖なる民の強い影響力が全く消散した後、そして憎むべきもの；即ち以前、神の神殿があった聖所の内部にエルサレム荒廢の偶像が置かれた後、預言書の中で普通に為されるように1日を1年とする1290日はすでに過ぎ去った。それで異教の儀式と慣習のゆえに、聖なる都市が42ヵ月のあいだ踏みにじられるのを神が許された後、異邦人の時代は終わりを告げた。<sup>13)</sup>

彼の計算によれば、異邦人の時はすでに満了した後なので、Bruteはキリストの再臨が間近いに相違ないと考えた。

## 絶えず変わる日付

数多く設定された黙示的な日付は、時が流れて過去のものとなり、それと結びついた予言は成就しないままで終わった。今では西暦70年のエルサレムの滅び、あるいは使徒たちの死から1,260年また1,290年を数えても、その結果は無意味なものに過ぎない。そこで起算点を、もっと後の時点にずらす必要が生じた。ローマカトリック教会に異端のレッテルを貼られて迫害されたグループは、「踏みにじる異邦人」がローマ法王政治であることを直ぐに見分けるようになった。迫害を受けたこれらのグループは、霊的エルサレムを踏みにじる期間である「千二百六十日」の間やむなく「荒野」に逃れた女として黙示録12章に描かれている「真の教会」は自分たちであると一般に考えていた。この見方によって、1世紀から4世紀のどこかにまで起算点を移す事が可能となった。4世紀はローマカトリック教会の権勢が増し加わっていた時である。

この「調整された」考えは宗教改革者の間で普通に見られた。スコットランドの有名な数学者また預言の研究者 *John Napier* (1550-1617) は西暦300年あ



るいは316年頃を起算点として、異邦人の時は16世紀の後半に終わるという説を考え出した。<sup>14)</sup>

時は流れて起算点はまたもや繰り下げられた。この度は法王が権力の地位を確実にした時期である6または7世紀に入る。例えばGeorge Bellは1796年にロンドンの*Evangelical Magazine*誌上で1,260年を西暦537年あるいは553年から数え、「1797年あるいは1813年」に反キリスト（ローマ法王）が失脚すると予言した。<sup>15)</sup> 1,260年についてベルはこう述べている：

聖なる都市は異邦人すなわちカトリック教徒に踏みにじられることになっている。彼らはクリスチャンを名乗っているが、崇拜と実践においては異邦人である；天使、聖徒、像を崇拜し、キリストの追随者を迫害している。これらの異邦人は日毎に捧げる犠牲を取り去り、キリストの見える教会を1,260年の間荒廃させる憎むべき物を設立した。<sup>16)</sup>

これはフランス革命さなかの1795年に書かれた。その後間もなく法王はフランス軍の捕虜となり、亡命を余儀なくされた。（1798年2月）極めて興味深いことに、フランスとイタリアで起きたこれらの驚くべき出来事は、殆ど1世紀前に数人の解説者によって、ある程度まで「予言」されていた。中でもスコットランドの牧師Robert Fleming, Jr. (c.1660-1716) が最も有名である。<sup>17)</sup>

これら歴史上の大事件によって彼等の予言が確証されたと、多くの人が考えたのは確かである！この理由で1798年は1,260年の終わる年であると考えるのが、時を経ずして聖書解説者の間でごく普通のことになった。

この見方は — 多少の違いはあるが — Charles Taze Russellと彼の追随者によっても採用された。そして今でも安息日再臨派の間で広く見られる。

## 政治および社会の変動が予言的推測をあおり立てる

1789-1799年のフランス革命は遠くフランス国外にも甚だしい影響を及ぼした。1792年フランス王朝が打ち倒されて共和国が宣言されたのに続いて、新過激主義指導者はフランス自体の国内に恐怖と混乱の時代をもたらしただ

けでなく、殆ど絶え間のない侵略戦争の時代を招いた。それは皇帝ナポレオン1世がワーテルローで敗れた1815年まで続く。革命がヨーロッパを初め世界の他の地域に残した余波は、預言研究に対する一方ならぬ関心を惹き起こした。この大変動は預言の解説者によって一部は予測されていたので、それは尚更であった。

歴史家はフランス革命が世界史の大きな曲がり角であったことを認めている。それは比較的安定した長い時代の終わりをヨーロッパにもたらすと共に、既存の秩序を崩壊させ、政治と宗教の思想を大きく変えた。

フランス革命とナポレオン・ボナパルトの戦争を、30年戦争（1618-1648）及び後の第一次世界大戦（1914-1918）と比較した歴史家Robert Gilpin はこれら三つの戦争について、「[国際的な]秩序の中でそれぞれは殆どすべての国がかかわった世界戦争であった。それで少なくとも振り返って言えば、人類史の主要な曲がり角であったと見なし得る」<sup>18)</sup>

もう1人の著名な歴史家R. R. Palmerは現代史上フランス革命が果たした重要な役割についてこう述べている：

20世紀半ばの今でさえ、未だ老いやらぬ人の生存中に…そして欧州諸国が以前の支配的地位をもはや持たないアメリカあるいは何処であれ、世界の他の地域で起きたすべての事に拘わらず、18世紀末のフランス革命が現代文明の曲がり角であったと言うことは今なお可能である。<sup>19)</sup>

長く続いたヨーロッパの政治および社会制度が革命の結果として覆されたことで、多くの人々は自分たちが正に終わりの日に生きていると信じた。様々の背景を持つ人々——牧師、政治家、弁護士、俗人——が預言の研究にかかわるようになった。預言に関する膨大な文書が作られ、預言に関する定期刊行物が数多く発刊され、預言に関する会議が大西洋の両側で開かれた。

黙示的な終末論の復興は英国で始まるが、欧州大陸とアメリカ合衆国にも直ぐに広がり、後者の場合、有名なミラー派運動に発展する。ダニエル8:14の解釈に基づいて重ねられた予測は、キリスト再臨の時として1843年、1844年あるいは1847年を一般に指し示すようになった。

この熱狂した空気の中で生まれたのが、異邦人の時の新しい解釈である。  
それによると、多用された1,260年の数が初めて倍の2,520年にされた。

下の表は、「日を年にする」方法で預言的な時の長さを数えて7世紀の間に得られた結果を示したものである。列記した36人の学者と預言解説者の殆どすべては、1,260日に言及した同じ基本的な聖書の句を基に計算しているにも拘わらず、期間が何時始まり、何時終わって成就するか点では一致が先ず見られない。彼らと追隨者が設定した異邦人の時代の終わりの日付は、なんと西暦1260年から西暦2016年にまで亘っている。それでも彼らは例外なく、説得力があると自分たちには思われる理由があってそれぞれの日付を算出して発表したのである。「異邦人の時代」についてイエスが言われたことに関して、この数を2倍にしたことから生じた結果は何であったか？

**第1表：1,260年の移り変わる多重適用**

| 解説者                 | 発表された年<br>(すべて西暦) | 適用         | 備考              |
|---------------------|-------------------|------------|-----------------|
| Joachim of Floris   | 1195              | 1-1260     |                 |
| Arnold of Villanova | 1300              | c. 74-1364 | 異邦人の時 = 1290年   |
| WalterZ Brute       | 1393              | 134-1394   |                 |
| Martin Luther       | 1530              | 38-1328    | 異邦人の時 = 1290年   |
| A.Osiander          | 1545              | 412-1672   |                 |
| J. Funck            | 1558              | 261-1521   |                 |
| G. Nigrinus         | 1570              | 441-1701   |                 |
| Aretius             | 1573              | 312-1572   |                 |
| John Napier         | 1593              | 316-176    |                 |
| D. Pareus           | 1618              | 606-1866   |                 |
| J. Tillinghast      | 1655              | 396-1656   |                 |
| J. Artopaeus        | 1665              | 260-1520   |                 |
| Cocceius            | 1669              | 292-1522   |                 |
| T. Beverley         | 1684              | 437-1697   |                 |
| P. Jurieu           | 1687              | 454-1714   |                 |
| R. Fleming, Jr.     | 1701              | 552-1794   | 360日の1260年      |
| " "                 | 1701              | 606-1848   | = 1242年 (ユリウス暦) |
| William Whiston     | 1706              | 606-1866   |                 |
| Daubuz              | 1720              | 476-1736   |                 |
| J. Ph. Petri        | 1768              | 587-1847   |                 |
| Lowman              | 1770              | 756-2016   |                 |
| John Gill           | 1776              | 606-1866   |                 |
| Hans Wood           | 1787              | 620-1880   |                 |

|                   |      |          |              |
|-------------------|------|----------|--------------|
| J. Bicheno        | 1793 | 593-1789 |              |
| A. Fraser         | 1795 | 756-1998 | 1242年（ユリウス暦） |
| George Bell       | 1796 | 537-1797 |              |
| " "               | 1796 | 553-1813 |              |
| Edward King       | 1798 | 538-1798 |              |
| Galloway          | 1802 | 606-1849 | 1242年（ユリウス暦） |
| W. Hales          | 1803 | 620-1880 |              |
| G. S. Faber       | 1806 | 606-1866 |              |
| W. Cuninghame     | 1813 | 533-1792 |              |
| J. H. Frere       | 1815 | 533-1792 |              |
| Lewis Way         | 1818 | 531-1791 |              |
| W. C. Davis       | 1818 | 588-1848 |              |
| J. Bayford        | 1820 | 529-1789 |              |
| John Fry          | 1822 | 537-1797 |              |
| John Aquila Brown | 1823 | 622-1844 | 1260年（太陰暦）   |

この表は1195年のフロリスのヨアキムから1823年のジョン・アクイラ・ブラウンまで1,260および1,290「日を年にした数」の多くの異なる適用の例を示している。ブラウン以後に続く解説者を大勢加えるのは容易いが、表が彼で終わっているのは、この時、異邦人の時を1,260年から2,520年に倍増する別の解釈が出現したからである。

## John Aquila Brown

預言に関する予測の長い歴史の上で英国のジョン・アクイラ・ブラウンは注目に値する役割を果たしている。ブラウンの生い立ちの記録は今のところ発見されていないが、彼は当時の黙示思想に強い影響を与えた人である。ダニエル 8:14の2,300日を年数とする考えを適用して、それが1843年（後に1844年）に終わるとした解説者は彼が最初であった。<sup>20)</sup> これはキリスト再臨論運動の最も重要な日付となった。<sup>21)</sup> 2,520年の期間に預言的な意味付けをしたのも、彼が最初である。

ブラウンの2,520年の計算は、ダニエル書4章にあるネブカドネザルの、切り倒された木の夢に出てくる「七つの時」を説明した彼の解説に基づいている。それは1823年に2巻の著作「夕暮れ：すなわち祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主の最後の勝利」(*The Even-Tide; or, Last Triumph of the Blessed and Only Potentate, the King of Kings, and Lord of Lords*) の中で初めて発表された。<sup>22)</sup> 彼はこの題目について書くのは自分が最初であることを特に記している：

預言的テーマについて大部の研究書が各時代を通して数多く書かれてきた；それでも私がいくらかの論評を加えようと思う題目に触れた著作は未だ目にしたことがないので、私はいささかの疑念をも抱かず、それに注目する事を読者諸氏に委ねる。預言成就の基礎と当然に考えられる預言的期間の目盛りの正しさが更に確証される事になるという確信を抱いてそうするのである。<sup>23)</sup>

ブラウンの解釈はネブカドネザルの夢の「七つの時」をレビ記26:12-28でイスラエルに対して述べられた預言的罰の「七倍」と少しも結びつけていない点で、彼より後の解説者とは異なっている。ブラウンによれば、「ネブカドネザルは後に続いて起こる三つの王国の型である。」ネブカドネザルを苦しめた「七つの時」すなわち7年について、彼は述べている：

従って[これらは]年数に相当する、大いなる週と考えられる。それは2,520年の期間にわたるもので、四つの圧制的な君主国の持続期間を含む。その期間の終わりに彼らはネブカドネザルと同じく「二つの裁き」である「時と期」によって「至高者（は）人間の国を治めて自己の意のままにこれを人に与へ…たまふ」ことを知るに至るのである。

ブラウンの計算によると2,520年はネブカドネザルの第1年、紀元前604年から1917年までの期間で、その時「イスラエル王国の全き栄光が満ちるであろう」とした。<sup>24)</sup>

ブラウン自身、この期間をルカ21:24の異邦人の時と結びつけることはしなかった。

それでもなお彼が2,520年を算出し、更にダニエル書4章に基づいてそうした事は、現代における異邦人の時の或る解釈にとって鍵となる役割を以来ずっと果たしてきた。

## 2,520 年を異邦人の時と結びつける

時を経ずして他の解説者たちも、新たに計算された2,520年が異邦人の時であると結論するようになった。しかし1,260日の場合と同様、考え出された結果はそれぞれに異なるものである。

(英国ロンドンの南ギルドフォード近郊オルバリーで1826年から1830年まで毎年開かれた) オルバリーパーク預言会議において、「異邦人の時代」は採り上げられた議題の一つであった。1826年の冒頭の論議の中で、それは *William Cuninghame* によって2,520年と結びつけられた。彼は十部族がシャルマネセルによって捕囚とされた年(彼はそれを紀元前728年とした)を起算点として選び、こうして最後の年すなわち終結する年は西暦1792年であるという結論に達した。これは当時すでに過去のものとなっていた年である。<sup>25)</sup>

多くの聖書解説者はマナセが捕らわれた時から「異邦人の七つの時」を数えた。その年は紀元前677年であると考えられていた。明らかにこれは2,300日の年として既に定められていた年と同じ年すなわち1843年あるいは1844年に、異邦人の時の終わる年を合わせるためである。<sup>26)</sup> 1835年に出版された *William W. Pym* 著「終わりの日における警告のことば」(*A Word of Warning in the Last Days*) は、「七つの時」の終わる年を1847年としている。興味深いことに彼はダニエル書4章の「七つの時」はもちろん、レビ記26章にある「七倍」に基づいて異邦人の時の2,520年を計算している：

換言すればモーゼが恐れを抱かせた裁き、それは七つの時すなわち2520年のあいだ続くのであり、ダニエルに啓示された裁きは、より大きな数である2520に相当する年数の後に聖所が清められることで終わりに至るのである。<sup>27)</sup>

しかしドイツの神学者 *J. A. Bengel* (1687-1752) が全く異なる根拠に基づいて設定した年、西暦1836年に期待を寄せる人々もいた。その人々は「七つの時」の終わりをそれと同じ年に合わせようと試みた。<sup>28)</sup>

事は流動的である例を挙げると、Hartfordshire, Watton の福音派司祭 *Edward*

*Bickersteth* (1786-1850) は「異邦人の七つの時」の起算点として異なる年を選び、終結する年として三つの異なる日付を考え出した：

シャルマナセルによるイスラエルの最初の捕囚がキリスト前727年に始まったとすれば、それはフランス革命が起きた1793年に終わる事になる。キリスト前677年のエサルハドンによる捕囚（ユダの王マナセの流刑と同じ期間）（列王第二 xvii. 23,24. 歴代第二 xxxiii.11）からならば、1843年に終わることになる。ネブカドネザルによるエホヤキムの最終的な廃位の年であるキリスト前602年から数えると1918年に終わることになる。これらの期間すべては、その終わる時に起きた、それぞれの出来事と関連があるかもしれず、真剣に注目するに値する。<sup>29)</sup>

19世紀の最も有名で最も学識豊かな千年至福説信奉者の1人に数えられるのは、英国ブライトンの聖マルコ教会の牧師 *Edward Bishop Elliott* (1793-1875) である。1914年という年について述べたのは、彼を以って初めとする。不朽の論文 *Horæ Apocalypticæ* (“Hours with the Apocalypse”) の中で彼は初め2,520年を紀元前727年から1793年までと計算したが、こう付け加えている：

言うまでもなく、前606年におけるネブカドネザル自身の即位とユダの侵攻から数えるならば、その終わりはずっと遅く西暦1914年になる。我々の予測する千年至福期の始まる年（彼は「西暦1862年頃」と定めていた）から丁度半世紀すなわちヨベルの期間である。<sup>30)</sup>

ここで留意すべき一つの要素は、エリオットの年代計算では紀元前606年がネブカドネザルの即位年であるのに対して、その後の *Nelson H. Barbour* と *Charles T. Russell* の年代計算では紀元前606年をネブカドネザルの第18年におけるエルサレム滅亡の年としていることである。

## ミラー派の運動

預言に関する英国の主要な著作は米国でも再版を重ね、この問題について

書いた著作者の多くに大きな影響を与えた。バプテスト教会の有名な伝道者 William Miller と彼の同志もその中に含まれる。彼らは1843年を指し示して、その年にキリストが再び現れるとした。少なくとも50,000人そして最終的には恐らく200,000人にも及ぶ人々がミラーの説を受け入れたと推定されている。<sup>31)</sup>

実際のところ様々の預言に関して彼らの採った立場は、過去または同時代の他の解説者が教えていたものである。ミラーが「異邦人の時代」の終わりを1843年としたのは、他の人々の説に従っていたに過ぎない。1840年10月14、15両日にマサチューセッツ州ボストンで開かれた第1回総会において、ミラーは講演の一つに聖書預言を採り上げ、「七つの時」すなわち2,520年を紀元前677年から西暦1843年まで及ぶ期間であると位置付けている。<sup>32)</sup> キリストは遅くとも1844年には再び現れることが期待された。

これほど長い間これほど多くの人によって聖書の裏づけがあると主張され、予告された年が到来し、そして過ぎ去ったが、それに基づいて期待された事は何一つ成就せずに終わった。

1844年の「大いなる失望」を味わった後でミラー自身をも含め、一部の人は時の計算を誤っていた事を率直に認めた。<sup>33)</sup> しかし時の計算そのものに誤りは無く、期待したことが間違っていたのだと主張する人々もいた。その後、用いられるようになった弁明の決まり文句で、「時は正しかったが、期待した事柄を間違えていた」のである。

この立場は後に安息日再臨派として知られるようになったグループに受け継がれた。その主張によれば、1844年にイエスは地に下る代わりに、人類の偉大な大祭司として対型的な贖いの日を開始するため天にある神殿の至聖所に入ったとされる。<sup>34)</sup>

このグループは1840年代の終わり頃に「キリスト再臨派」の他の人々から離れ、元の運動の内部で初めて大きな分裂を惹き起こした。

1844年という年に固執したミラー派の指導者の或る人々 — Apollos Hale, Joseph Turner, Samuel Snow, Barnett Matthias など — は次のように唱えた。目に見えない霊的な様であるにせよ、イエスは1844年に花嫁として確かに来られた。天より自ら下ったのではなく、霊的に王の座に就かれたのである。



1844年に「この世の王国」はキリストに与えられたと、彼らは主張した。<sup>35)</sup>

## ミラー派の運動から派生したグループ

こうして1844年以降、ミラー派の「キリスト再臨派」運動は次第に幾つかの再臨派グループに分裂した。<sup>36)</sup> 1845年, 1846年, 1847年, 1850年, 1851年, 1852年, 1853年, 1854年, 1866年, 1867年, 1868年, 1870年, 1873年, 1875年等々, 日付が急増し始め、それぞれの日付には言い広める人々と支持者がいて、分派を益々増やすことになった。1852年にキリスト再臨派の指導者の1人 *Jonathan Cummings* は、年代計算に関する「新しい光」を受けたとして再臨の年は1854年であろうと宣言した。ミラー派の多くの人がかミングスに加わり、この新しい日付を擁護する定期刊行物 *World's Crisis* が発刊された。<sup>37)</sup>

日付以外の要素がキリスト再臨派運動の構成に役割を果たし始めた。現在に至るまでそれらの要素は安息日再臨派、エホバの証人および神の教会の或る宗派を含め、キリスト再臨論から発展した数多くの運動の中で著しい特徴を成すように思われる。これらの要素の一つに条件つき [— 生まれつきではない —] 魂の不滅がある。その自然の結果、神に退けられた人の究極の運命は意識のある責め苦ではなく、滅び即ち絶滅であると教えられることになる。三位一体の信条もキリスト再臨論者の一部で論争点となった。(これらが発展し、その発展がミラー派の運動から派生したグループの分裂に与えた影響については1章の付録を参照)

これらの動きは、まだ10歳代のチャールズ・ティズ・ラッセルがペンシルバニア州アレゲーニーで聖書研究グループを立ち上げた時までに既に起きていた。1860年代の終わり以降、ラッセルは当時のキリスト再臨論者のグループの一部との接触を次第に強めて行く。彼はそのグループの一部の牧師たちと親密な関係を築き、ジョージ・ストーズの *Bible Examiner* を含め、彼らの文書を読んでいた。条件主義や反三位一体の立場そして「来るべき時代」に関する見解の殆どを含め、その主要な教えの多くを、ラッセルと彼の同志は次第に受け継いだ。最後に1876年、ラッセルは彼らの年代計算の改訂版をも採用した。

それは2,520年の異邦人の時が1914年に終わることを示唆する年代計算である。従ってラッセルの聖書研究者運動は、本質的な面のすべてにおいて、これもまたミラー派の運動から派生したものと見る事が出来るであろう。

ではものみの塔運動の創始者ラッセルの年代計算すなわち異邦人の時代を2,520年の期間であるとし、それが1914年に終わるとしたのに加え、キリストの见えない臨在の始まる年を1874年とした年代計算の最も直接の源は何であったのか。Nelson H. Barbourがその人である。

## ネルソン H. バーバー

ネルソン H. バーバーは1824年ニューヨーク州オーバーンで生まれた。1843年、19歳の時にミラー派の運動に加わったが、1844年の「大いなる失望」の後、「自らの信仰」を全く失ってオーストラリアへ行き、ゴールドラッシュのあいだ採鉱に従事した。<sup>38)</sup> その後1859年に英国ロンドン経由で米国に帰国する。この航海中に預言の年と時期に再び関心と呼び起された経緯を、バーバーは次のように回想している：

船はキリスト再臨論者の兄弟[バーバー自身]を乗せてオーストラリアを離れた。彼は自らの信仰を失い、長年のあいだ真つ暗闇の中に置かれていた。長い船旅の退屈しのぎに、英国人の[1人の]牧師が預言を系統立てて読むことを提案した：その提案に兄弟は直ぐ賛成したのである。以前の年月ミラー派に属していたことから彼は、たとえ過去の話ではあっても牧師が答えに窮する論点があることを良く知っていた。<sup>39)</sup>

この読会の間にバーバーはミラーの計算に重大な誤りを発見したと考えた。ミラーが黙示録11章の1,260「日の年」の始まりを西暦538年とし、ダニエル書12章の1,290日と1,335日の年の初めを30年早く西暦508年としたのはなぜか。三つの期間はすべて同じ年に始まるのではないのか。それで1,290年は1828年に、また1,335年は — 1843年ではなく — 1873年に終わるはずである。「[1860年に]」にロンドンに着くと、彼は直ぐに大英博物館の図書

館へ行き、これらの預言に関する膨大な著作の中からエリオットの *Horæ Apocalypticæ* を見つけた」その中にエリオットは友人の *Christopher Bowen* 師の作成した表 “The Scripture Chronology of the World” をそのまま載せている。この表は人間の創造以降の5,979年が1851年に終わることを示していた。<sup>40)</sup> 5,979年に21年を足すことによってバーバーは6,000年が1873年に終わることになるのに気付いた。これは彼自身が計算した1,335年の期間を確証するもので、彼にとって重要かつ感動的な出来事であった。

米国に帰ると早速かれは、主の来られる年であると彼が新たに考えた日付にキリスト再臨論者の関心を抱かせようと努める。1868年以降、彼は自らの研究結果を語り、また発表することを始めた。年代計算に関する彼の多くの論文が再臨派クリスチャン協会の二つの主要な機関紙 *World's Crisis* と *Advent Christian Times* に掲載された。1870年にも彼は100頁のパンフレット「1873年に主が来られることの証拠；即ち真夜中の叫び」(*Evidences for the Coming of the Lord in 1873; or the Midnight Cry*) を出版している。前述の引用文は第2版からのものである。<sup>41)</sup> 1873年に彼は自身の月刊誌「真夜中の叫び、及び朝の先触れ」(*The Midnight Cry, and Herald of the Morning*) を発刊したが、その発行部数は3ヵ月を経ずして15,000部に達している。<sup>42)</sup> 目指していた年である1873年が間もなく過ぎ去ろうとしていた時、バーバーは再臨の年を1874年秋に延ばした。<sup>43)</sup> しかしその年もまた来て過ぎ去った時、バーバーと彼の信奉者は深い懸念を抱いた：

1874年になっても肉体のイエスが文字通りの雲の中に現れなかった時、「真夜中の叫び」について為されたすべての論議は全体にわたって再検討された。そして何の誤りも欠陥も見えなかったもので、キリストが来られる時の有様に関係すると思われる聖句を注意深く調べた結果、肉体のイエスが再び来られる事を期待するのは誤りであることが直ぐに分かった～<sup>44)</sup>

## 「目に見えない臨在」

*Midnight Cry* の読者 B. W. Keith (後に *Zion's Watch Tower* の寄稿者の1人) は、

～新約聖書の極めて正確な逐語訳Emphatic Diaglott（1864年 Benjamin Wilson 訳および出版）を用いてマタイ24章を注意深く読みながら37節と39節まで読み進んだ時、次のように書かれているのに気付いて大変驚いた：「ノアの時代のように人の子の臨在もそのようであろう」<sup>46)</sup>

こうしてキースは一般に「来る(時)」と訳されるギリシャ語 *parousia* がここでは「臨在」と訳されていることに気付いた。当時の解説者の間に広まっていた考えは、キリストの再来には二つの段階があり、最初の段階では目には見えないというものだった。<sup>45)</sup> イエスは1874年の秋に、見えないけれども来ておられた、そしてそのとき以来、目には見えない様で臨在されているのではあるまいか。

バーバーにとってこの解明は魅力的に思えただけでなく、彼と彼の同志は自分たちの計算の結果に少しの誤りも発見できなかったので、ここに問題の解決策があると考えた。期待した事柄が間違っていたとはいえ、日付は正しかったという事である。

「正しい時に間違ったこと」を期待した場合が正にこれであると、又もや見なされた：

それで彼らがイエスに期待した有様は誤っていたとはいえ、「真夜中の叫び」によって指し示されていた時は正しかったこと、そして「花婿」が1874年の秋に來られたことは明らかであった～<sup>46)</sup>

しかし「真夜中の叫び、及び朝の先触れ」誌の読者の大半にとってこの説明は信じ難いもので、15,000人の読者は「200人ほどにまで急速に減ってしまった」バーバー自身、至福千年期の朝は既に明け始めたことを確信していたので、「真夜中の叫び」は雑誌の名称としてふさわしくないと考えた。彼はこう語っている：「真夜中の叫びをどのようにして朝に上げることが出来るか、誰か私に知らせてくれないだろうか」<sup>47)</sup> こうして1874年10月に休刊した雑誌は1875年6月に、以前の題名の最初の部分を省いた「朝の先触れ」

として再発行された。

ごく最初の頃の号の一つ（1875年9月）でバーバーは、異邦人の時が1914年に終わるとした彼の計算の結果を発表した。<sup>48)</sup>（次頁を参照）

## チャールズ・テイズ・ラッセル

1870年ペンシルバニア州アレゲーニーの18歳の実業家チャールズ・テイズ・ラッセルは、父ジョーゼフ及び数人の友人と共に聖書研究会を立ち上げた。<sup>49)</sup> このグループが作られたのは、前述のミラー派に以前属した人々の一部、中でも Jonas Wendell, George Storrs 及び George Stetson とラッセルが縁を結んだことに端を発している。

ペンシルバニア州イーデンボローのアドベントリスト・クリスチャン教会の牧師ウェンデルは1869年にアレゲーニーを訪れており、彼の集会に思いがけず出席したラッセルは地獄の火の教義に対するウェンデルの批判に甚だ感銘を受けた。ラッセルはカルバン教徒として育ち、予定説と地獄の火の教義に対する疑問ゆえにこの宗教的背景との関係を絶ったばかりであった。この時期かれは宗教の面で深刻な危機の最中にあり、聖書が本当に神の言葉であるのか疑問に思うほどであった。ウェンデルとの出会い、又その後ストーズの雑誌 *Bible Examiner* を読んだことで、彼は聖書に対する信仰を取り戻した。この雑誌の記事は、ラッセルの研究会で定期的に討議されたものと思われる。

ラッセルはジョナス・ウェンデルを含め、一部の再臨論者が1873年にキリストの再来を期待している事を知っていたが、彼自身は時を設定し、日付を定める考え方を全く受け入れていなかった。その後1876年に彼の立場は変わり始めた：

これらの教義と希望に関連して預言的な時間に特に注意を惹きつけられたのは1876年の1月頃であった。事の次第はこうである：編集者 N. H. バーバー氏から送られてきた「朝の先触れ」(*The Herald of the Morning*) と題する新聞を受け取った。<sup>50)</sup>

「肉体を持たず、人の目には見えない霊者として盗人のように」というキリストの再来の有様に関して、バーバーのグループが自分自身のグループと同じ結論に達しているのを知って驚いたと、ラッセルは述べている。

ラッセルは年代計算について直ちにバーバーに手紙を送った。そしてその後1876年の夏に商用で行くことになっていたフィラデルフィアで彼と会うことを取り決めた。「主の臨在と『収穫』の始まった1874年が預言の指し示す年であると言うのであれば、そのことを」、ラッセルはバーバーに証明してもらいたかったのである。「彼はやって来た。そして私は証拠に満足した」とラッセルは語っている。<sup>51)</sup>

これらの出会いの間に1874年を初め、異邦人の時代の計算を含めてバーバーの時の計算のすべてをラッセルが受け入れたのは明らかにである。<sup>52)</sup> フィラデルフィアに滞在中にラッセルの書いた「異邦人の時代：いつ終わるか？」と題する記事が、ジョージ・ストーズの *Bible Examiner* 誌1876年10月号に掲載された。 *Examiner* 誌27頁でレビ記26:28,33およびダニエル書4章の「七つの時」「Seven times」に言及してラッセルは異邦人の時代を紀元前606年に始まって西暦1914年に終わる2,520年の長さに確定した。これはバーバーが既に結論に達しており、1年前の1875年に発表し始めていた日付と全く同じものである。

## 1914年を待ち望む

異邦人の時の終わりは、人類にとって正に「なに」を意味するのだろうか。1874年のキリストの再臨に関連して、記憶に留めるべき重大な事柄が起きたと喧伝されたものの、そのすべては人間の目には見えない霊的な領域で起きたということで、目には見えないとされた。1914年そして異邦人の時代の満了も同様なのか、それとも地球と地球上の人類にとって、見れば分かるほど明白な変化がもたらされるのだろうか。

1889年に出版された書籍「時は近づけり」(*The Time is at Hand*) (後に「聖書研究」(*Studies in the Scripture*) の第2巻と呼ばれた) の中で、ラッセルは1914年

について「不完全な人間の支配の極限である事を証明する聖書からの証拠がある」と述べた。その結末は何か。ラッセルは七つの点に分けて彼が1914年に期待する事柄を列挙している：

第1：その時、神の王国は～宇宙的な支配を完全に掌握しており、その結果、地に「設立される」すなわち固く建てられる。

第2：こうして支配権を執る権利を持つ者が地の新しい支配者として君臨することが明白になるであろう～

第3：西暦1914年が終わる前の何時か、神に認められたキリストの教会、「王なる祭司」「キリストの体」の最後の成員がかしらと共に栄光を受けることが明白になるであろう～

第4：その時以降、エルサレムはもう異邦人に踏みにじられずに、神の不興という塵の中から栄光へと高められることが明白になるであろう；異邦人の時が満了すなわち完了するからである。

第5：その時まで、あるいはそれより早くイスラエルの盲目を取り去ることの始まりが明白になるであろう；彼らの「盲目は一つには」異邦人が入って来て数のそろうまで」続くことになっているに過ぎないからである（ローマ 11:25）～

第6：「世の初めから今に至るまで起きたことのない大難難」が最高潮に達して全世界は無政府状態に陥り～苦しみ悩む人類は、平和と祝福に満ちた「新しい天と新しい地」を認めるに至ることが明白になるであろう。

第7：その年以前に権力を整えた神の王国は地にあり、それから異邦人の偶像（ダニエル 2:34）を打ち砕く——そしてこれらの王たちの権力を全く滅ぼし尽くすことが明白になるであろう。<sup>53)</sup>

これらは真に大胆な予言である。このような驚くべき出来事がその後の25年以内に起きると、ラッセルは本当に信じていたのだろうか。信じていたのは確かである。事実、彼は自分の年代計算が単なる自分の発案ではなく、神による年代計算であると信じていた。

1914年という日付について彼は1894年にこう書いている：

これらの数字を変える理由は全く見当たらない — たとえ望んでも、変える事は出来ないのである。それらは神による日付であって、我々のものではないと信ずる。しかし1914年の終わりは苦難の時の始まりではなく、その終わりであることに留意すべきである。<sup>54)</sup>

それで「苦難の時」は1914年以前、「遅くとも1910年までに」始まって、1914年に最高潮に達するものと考えられていた。<sup>55)</sup>

しかし1914年の丁度10年前、1904年にラッセルはこの事に関する見解を変えている。

1904年7月1日号の「シオンのもののみの塔」(Zion's Watch Tower) 誌に掲載された「全世界の無政府状態 — 西暦1914年の直前それとも直後」と題する記事の中で、世界的な無政府状態を伴う苦難の時は1914年10月よりも後に始まるであろうと、ラッセルは論じた。

千年期の祝福に先立つ大艱難の無政府状態は西暦1914年10月以後に — 我々の考えではその時以後きわめて速く — 「一ときの間に」「突如として」最高潮に達するものと思う。西暦1914年10月に終わる「我々の40年の」穫り入れは聖書に示されたキリスト教国の運命すなわち恐るべき無政府状態の時期を含むとは考え難いからである。<sup>56)</sup>

このように変えたことで、一部の読者は年代計算の仕組みに他の誤りもあるのではないかと考えた — エルサレムの滅びは紀元前606年ではなく紀元前587年に起きたとする Bishop Ussher の年表の方がもっと正しいのではと、ほのめかず読者まで現われた。これによれば2,520年が終わるのは1914年ではなくて1934年頃になる。しかしラッセルは1914年を示すと主張される「タイム・パラレル」に言及して、1914年に間違いはないと断言した：

数字を変える理由は何ら見当たりません：そうする事はユダヤ教の時代とキ



リスト教の時代が向き合って組みをなす極めて著しい類似と調和を台なしにするでしょう。<sup>57)</sup>

別の読者の質問に彼は次のように答えている：

預言の期間の調和は、我々の聖書年表の正確なことを示す最も強力な証拠の一つです。それは完全な機械の歯車のように噛み合います。たとえ1年でも年表を変えることは、このすべての調和を壊してしまうでしょう。～様々の証拠が寄せ集められてユダヤ教の時代とキリスト教の時代の間には対応する期間のある事が極めて正確に示されているのです。<sup>58)</sup>

このような論議を更に支持する記事がスコットランドのEdgar兄弟によって書かれている。<sup>59)</sup>

## 深まる疑念

それで自らの日付に対するラッセルの確信は1904年の時点では1889年と少しも変わっていなかった。時の問題に関して理解を得ることは、黙示録7:3に書かれている「額に証印を押す」ことであると、彼はその年に書いている。<sup>60)</sup>

しかし1914年が更に近づくにつれて、ラッセルは述べる事柄にますます慎重になった。1907年のこと、1人の聖書研究者の質問に答えて次のように述べている。「我々の計算が絶対に確実であると主張したことは一度もない；熟知しているとも、あるいは議論の余地のない証拠に基づくとも、更には事実、知識であると主張したこともない；計算の結果は信仰に基づくというのが、我々の初めからの主張である」<sup>61)</sup>

日付は、彼が13年前に述べた「神による日付」では最早ないらしく思われた；今やそれは不確かであるかもしれない。1914年(そして1915年)が過ぎても、期待された事柄が何一つ起きない可能性さえ、ラッセルは考えていた：

しかし我々の期待とはまるで違う場合を考えてみよう：世界情勢が全く平穏で、『選ばれた者』の『変えられる』事も、生来のイスラエルが新しい契約の下での恩寵（ローマ11:12,15）を再び受けることも無いままに西暦1915年が過ぎたでしょう。ではどうなのか？ 我々の年表が間違っていた証拠ではないだろうか。正にそのとおりである！ そのうえ大きな失望に終わるのではなかろうか。そのことに間違いない！ ～何という痛手であることか！ 我々のハープの弦が一本切れたとでも言おうか！ しかし読者諸賢に告ぐ、ハープの他の弦は全て調っている。この事を誇れるのは、この世にある神の民の集団の中で我々をおいては他にない。<sup>62)</sup>

もう一つの不確実な点は、0年（紀元前1年と西暦1年との間）を計算に含めるかどうかであった。この問題は早くも1904年にラッセルによって採り上げられていたが、1914年が近づくにつれて重要性を増してきたのである。

1914年という年は単に2520から606を引き去ることによって算出されていたが、現在の暦の上では年代の計算に0年は考慮されない事が次第に理解されるようになった。

従って紀元前606年10月1日から西暦1年1月初めまでは605年と3ヵ月に過ぎず、西暦1年1月初めから1914年10月までは1913年9ヵ月に過ぎないため、合計すると2,520年ではなくて2,519年になる。これは2,520年が1914年10月ではなく、むしろ1915年10月に終わることを意味する。<sup>63)</sup> しかし1914年8月にヨーロッパで戦争が始まった時、この誤りを訂正するのは時機を失したものと明らかに思われたようだ。この問題はそのままにされた。

1914年も目前に迫った1913年までには、その年に関する発言が更に慎重になっていく。*The Watchtower* 誌 1913年6月1日号に掲載された記事「自身自身の節度を明らかに示しなさい」（“Let Your Moderation Be Known”）の中で、ラッセルは「今年あるいは来年などに、何が起きるかを推測して貴重な時間と精力」を無駄にしないようにと読者の注意を促している。起きるべき出来事として以前に公表した時のラッセルの確信はもはや見られない：「教会の

完成が1914年以前に達成されようとなかろうと——これはキリストにおける神の恩寵の良いたよりなのである」<sup>64)</sup> 同じ年の10月15日号の誌上で彼の発言は更にあいまいなものになっている：

我々は世界支配がメシアの手に渡される時の来るのを待ち受けている。その時は1914年10月あるいは1915年10月ではないかも知れない。それを言うことは出来ない。この問題に関して我々は正しい計算から何年も外れている可能性がある。確信を持って言うことは出来ない。我々には分からない。これは信仰の問題であって知識の問題ではない。<sup>65)</sup>

これよりも以前、1914年は「神による日付」の一つであり、「たとえ1年でも年表を変えることは、このすべての調和を壊してしまう」はずであった。ところが今や「この問題に関して正しい計算から何年も外れている可能性がある」うえ、この問題に関しては何も「確信を持って」言うことは出来ないのである。これは正に豹変に他ならない！それは「信仰の問題」と言うのであれば、誰また何に基づく信仰のことを言うのか、いぶからざるを得ない。

自らの年代計算に対するラッセル自身の信念が揺らいでいることは、1914年1月1日号の *The Watchtower* 誌上で更に明らかになった。彼はこう述べている：「すでに指摘したとおり、1914年の今年、我々は摂理による根本的で急速な変化が期待どおり見られると全く確信している訳ではない」<sup>66)</sup> 同じ号の記事「その時代は近づいた」(“The Days Are At Hand”) から、この事は更に明らかである：

1914年10月までに教会が栄光を受けない事が万一、後から分かったとしても、我々は何であれ主のご意思に満足することに努めるであろう～教会が去ることも、世の混乱その他が生ずることもなく1915年の過ぎることが万一あれば、ある人々にとってそれは悲劇的に思われるかもしれない。我々にとってそうではない～主の配慮によってその時の来るのが25年後であったとしても、それは我々の望むところである～1915年10月が過ぎても、我々がなおこの世にあり、

物事の状態が現在と殆ど変わらず、世界が紛争の解決に向けて進歩しているように思われ、世の中の混乱する兆しも見えず、有名無実の教会がなお連合しなかった等々のことがあったとすれば～我々の計算は明らかにどこかで誤っていたという事になろう。その場合、間違いがあるかどうか預言を更に調べる事になる。すると「時期は正しかったが、期待した事柄が間違っていたのでは」と考え至るであろう。これは主のご意思によることなのかも知れない」<sup>67)</sup>

また1914年5月1日号の誌上で——自分が以前述べた「神による日付」そして予言どおり1914年に事態が展開することを「証明する聖書的な根拠」のことは一切忘れて——ラッセルは読者に次のように告げている：「時と時期に関して本誌上および『聖書研究』(STUDIES IN THE SCRIPTURES) 6巻に発表した事柄すべては『暫定的な体裁』のものである。すなわち確言ではなく、我々は熟知しているとの主張でもなくて、聖書の教えは『かくかくしかじか』と思われるとの提言である」<sup>68)</sup>

その2ヵ月後、ラッセルは彼の年表をことごとく正に破棄しようとしていたと思われる。1914年以降も「聖書研究」(*Studies in the Scriptures*)の配布を続けるのかどうか問い合わせた1人の聖書文書頒布者にラッセルはこう答えている：

これらの書籍は福音の時代と福音の業が続くとすれば、何年にもわたって今後とも販売され、読まれるものと考えます。～これらの見解が絶対に確実であると述べたつもりはなく、我々が述べたのは、読んで考え、判断する過程であって、自分で考えて判断する義務と特権は読者各自に任されています。それは今から100年後でも関心事でしょう；思考と推論にすぐれた人ならば、我々が発表した事柄になお関心を持つでしょう。<sup>69)</sup>

このように1914年7月までにはラッセルも1914年の日付がおそらく誤りで、その問題に関する彼の著作も百年後の聖書研究者が歴史的な関心を持つに過ぎないとの考えを今や受け入れる用意があったらしく思われる！

## 大戦の勃発に対する反応

年代計算に関して確信が揺らいだラッセルだが、1914年8月にヨーロッパで戦争が勃発したことで確信を取り戻し始めた。世界情勢は予言と寸分たがわぬ成り行き——「世の混乱」は資本家階級と労働者階級との階級闘争であって世界的な無政府状態を招く——になった訳ではないものの、ラッセルは大戦がその情勢への前兆であると考えた：

今たけなわの戦争の要因は社会主義であると、我々は信じる。そしてこれは世界で最大かつ最悪の戦争——また恐らく最後の戦争であろう。<sup>70)</sup>

1914年のその後にラッセルはこう書いている：

諸国家間の現在の苦境はこの悩みの時の初めに過ぎないと思われる。～戦争の後の無政府状態が本物の悩みの時になるであろう。我々の考えでは、この戦争で諸国家が弱体化する結果、戦後には社会主義の思想を採り入れる試みが為され、その事は諸政府の反発を招くであろう——[等々、世界的な階級闘争と無政府状態が惹き起こされる]<sup>71)</sup>

千年至福説の他の著述家と同様、ラッセルは異邦人の時の終了がユダヤ人のパレスチナ復帰を意味するものと信じていた。しかし1914年の終わり近くになっても、パレスチナとエルサレムは依然として異邦人に占拠されていた。予言されたとおりの1914年に復帰が始まらないのは明らかと思われた。そこでラッセルは *The Watch Tower* 11月1日号で、異邦人の時の終わりが意味するのはユダヤ人の迫害の終結であるという再解釈を試みた：

ユダヤ人を踏みにじることは終わりを告げた。世界中どこでも——ロシアでさえもユダヤ人は今や自由である。9月5日ロシア皇帝はロシア帝国のユダヤ人すべてに対して布告を出した；しかもこれは異邦人の時が満了していなかつ

た時である。布告によればユダヤ人がロシア陸軍の最高位に昇進する道も開かれており、その上ユダヤ人の宗教は、ロシアのどの宗教とも同じ自由を享受できることになった。今ユダヤ人が踏みにじられている所があるだろうか。ユダヤ人が侮蔑にさらされているところがあるだろうか。今のところ、彼らはどんな迫害をも受けていない。エルサレムを踏みにじることは止んだと、我々は信じる。異邦人がエルサレムを踏みにじる期間は終わったからである。<sup>72)</sup>

しかしラッセルが述べた、ロシアその他におけるユダヤ人の救済は結局一時的なものに過ぎなかった。無論のこと、彼は第二次世界大戦の間ドイツ、ポーランドその他の国々でユダヤ人が激しい迫害に逢うようになったのを予見できた訳ではない。

第一次世界大戦の勃発から1916年10月の死の時に至るまで、自らの年代計算に対してラッセルが持ち直した確信は最後まで揺らぐことがなかった。その期間の *The Watchtower* 誌のあれこれから以下に掲げる抜粋は、その事を示している：

1915年1月1日号：「～大戦は全能の神の大いなる日 —— 『我らの神の報復の日』 —— に関連して聖書に預言された戦いである」<sup>73)</sup>

1915年9月15日号：「聖書の年表を今の時代にまで辿ると、我々は人類の大いなる週の大きいなる7日目の正に夜明けにいる事が分かる。これは今我々の周囲至る所で起きている出来事によって十二分に裏付けられる」<sup>74)</sup>

1916年2月15日号：「『聖書研究』(STUDIES IN THE SCRIPTURES) 第4巻において、我々はいま生じている出来事また更に悪化することになる事態をはっきりと指摘している」<sup>75)</sup>

1916年4月15日号：「日付は全く正しいことが証明されていると、我々は信ずる。異邦人の時は終わった。そして今や神は、メシアの王国に道を開くため異邦人国家が自滅するままにされるのである」<sup>76)</sup>

1916年9月1日号：「異邦人の時として知られる預言的期間が年代計算から見  
て1914年10月に終わった事は、我々にとって今なお明白と思われる。国家に臨  
む大いなる怒りの日がそこで始まったという事実は、我々の期待がまぎれもな  
く実現したしるしである」<sup>77)</sup>

ところが第一次世界大戦は1918年11月に突然に終わりを告げ — 予言さ  
れていた世界的な社会主義革命と無政府状態が戦争に続いて起きることは  
なかった。「神に是認されたキリストの教会」の最後の成員が栄光を受ける  
こともなく、エルサレムも相変わらず異邦人の支配下にあった。神の王国  
が「異邦人の像」を打ち砕いた訳でもなく、苦悩に満ちた人類は「新しい  
天と新しい地」をどこにも見なかった。「時は近づけり」(*The Time is at Hand*)  
と題する本に列挙された七つの予言の一つたりとも成就しなかったのであ  
る。<sup>78)</sup> ラッセル師の「聖書研究者」たちが困惑したことは論を俟たない。

それでも — 予言された事柄の中にあった訳ではないが — ある事が起き  
ていた：世界大戦である。予言は外れたものの、時期は結局正しかったので  
はあるまいか。1844年以後に再臨派そして1874年以後にバーバーと彼の同志  
が頼みの綱とした弁明 — 「時期は正しかったが、間違った出来事を期待し  
ていた」 — がこの度は更に適切なものに思われた。<sup>79)</sup> しかしその時期を基  
にした予言がすべて外れているのに、時期が正しかったなどと言えるだろ  
うか。ラッセルの追随者の多くは、予言された出来事が一向に起きないた  
め、何年ものあいだ困惑しきっていた。数年の経過を経た後、ラッセルの  
後継者として「ものみの塔協会」(Watch Tower Society) 会長の職にあった *J. F. Rutherford* は、1914年以降「実際には」何が成就していたのかを順々に説明  
し始めた。

1922年9月5日～13日のシーダーポイント大会における講演「天の王国  
は近づいた」の中でラザフォードは、神の王国は地上ではなく、見えない天  
で1914年に実際に設立されていたと聴衆に語った！<sup>80)</sup> そして3年後の1925  
年、この出来事に黙示録12章を適用して、神の王国はこの預言の示すとおり

1914年に天で生まれたと述べている。<sup>81)</sup>

これより以前、ものみの塔 (Watch Tower) が終始一貫して予言していたのは、誰の目にも見える明らかな有様でキリストが地の支配権を執るというものだった。今度はそれが選ばれたグループだけに明らかにされる、目に見えないものと説明された。

また1922年のシーダーポイント大会において、ラザフォードは「1918年あるいはその頃に主はご自身の（霊的な）神殿に来られた」という見解を初めて明らかにした。<sup>82)</sup> これより以前、ラッセルと彼の同志は、1878年に天への復活が起きたという見解を抱いていた。しかし1927年にラザフォードはその出来事を1918年に移した。<sup>83)</sup>

同様に1930年代の初めにラザフォードはキリストの目に見えない臨在の始まりを1874年から1914年に移している。<sup>84)</sup>

このようにラザフォードは、成就せずに終わった予言を、1914年と1918年に結びつけた、目に見えない霊的な一続きの出来事に少しずつ置き換えていった。1914年から90年を経て尚エホバの証人はラザフォードの「説明」を固持している。

## 要 約

「異邦人の時代」が紀元前607年（最初は前606年）に始まって西暦1914年に終わる2,520年であったという解釈は、1876年秋にチャールズ・テイズ・ラッセル師が神から与えられた啓示などではない。それどころか、その起源は遠い過去にあって長い発展の歴史がある。

その起源は西暦1世紀のラビ Akiba ben Joseph が初めて提案した「1日を1年とする原則」にある。9世紀以降、この原則は幾人かのユダヤ人の律法博士によってダニエル書の年代に適用された。

クリスチャンの間でこの考え方を採り入れたのは、12世紀のフロリスのヨアキムが恐らく最初である。黙示録の1,260日とダニエル書の三時半に、これを適用している。ヨアキムの死後、彼の追隨者は1,260日の期間をルカ 21:24の異邦人の時代であると考えた。この解釈は、その後の何世紀も異端



としてローマ教会に迫害された宗教改革者を含むグループの間で普通に見られた。

時が経つにつれ、そして期待外れに終わった以前の説明の間違ったことが分かったと、1,260（あるいは1290）年の起点は、その当時から見て近い将来に終わるようにするため、次第に繰り下げられた。

2,520年を最初に考え付いたのは、明らかに1823年のジョン・アクイラ・ブラウンである。彼の計算はダニエル書4章の「七つの時」に基づいていたが、これをルカ21:24の「異邦人の時代」と同じものと考えた訳ではない。しかしこの事をする解説者たちが直ぐに現われた。紀元前604年を起点と定めて、ブラウンは七つの時の終わる年が1917年であるとした。その後の数十年の間、他の聖書解説者たちは異なる起点を用いて、数多くの異なる終点の年を導き出した。聖書の「ヨベルの年の周期」を試しに用いて2,450（あるいは2,452）年（ $49 \times 49 + 49$ ）の期間を導き出した解説者もいて、これが異邦人の時代の期間であると考えられた。

ここに掲げる表は、前世紀の異なる著述家が2,520（および2,450）年を適用した例の**抜粋**である。算出された結果は実際のところ非常に多いため、1830年代と1930年代の間で異邦人の時の終点とされる年が出ていない年を1年でも見出すのは恐らく難しいほどである。従って1914年あるいはそれに近い1915、1916、1917、1918、1919、1922及び1923年などを指摘している解説者が多くいるのは、驚くには当たらない。第一次世界大戦が偶然1914年に起きなかったならば、1914年という年は期待外れに終わった他の年の洪水の中に埋もれて、今では忘れ去られていたであろう。

**第二表：2,520年（又は2,450年）の適用**

| Expositor          | Date | Publication                     | Application BCE–CE | Comments                                           |
|--------------------|------|---------------------------------|--------------------|----------------------------------------------------|
| John Aquila Brown  | 1823 | The Even-Tide . . .             | 604–1917           | = “Seven times” of Daniel 4                        |
| William Cuninghame | 1827 | Dialogues on Prophecy, Vol.1    | 728–1792           | Report of the prophetic conferences at Albury Park |
| Henry Drummond     | 1827 | ” ”                             | 722–1798           |                                                    |
| S. Faber           | 1828 | The Sacred Calendar of Prophecy | 657–1864           |                                                    |
| Alfred Addis       | 1829 | Heaven Opened                   | 680–1840           |                                                    |
| William Digby      | 1831 | A Treatise on the 1260 Days     | 723–1793           |                                                    |
| W. A. Holmes       | 1833 | The Time of the End             | 685–1835           |                                                    |
| Matthew Habershon  | 1834 | A Dissertation . . .            | 677–1843           |                                                    |

## 第 1 章 解釈の歴史

|                     |      |                                           |                    |                                                                     |
|---------------------|------|-------------------------------------------|--------------------|---------------------------------------------------------------------|
| John Fry            | 1835 | Unfulfilled Prophecies . . .              | 677-1843           |                                                                     |
| William W. Pym      | 1835 | A Word of Warning . . .                   | 673-1847           |                                                                     |
| William Miller      | 1842 | The First Report . . .                    | 677-1843           |                                                                     |
| Th. R. Birks        | 1843 | First Elements of Sacred Prophecy         | 606-1843           | Gentile times = 2,450 years                                         |
| Edward B. Elliott   | 1844 | Horae Apocalypticæ, Vol. 111              | 727-1793           |                                                                     |
| " " "               | 1844 | " " "                                     | 606-1914           | A second alternative                                                |
| Matthew Habershon   | 1844 | An Historical Exposition                  | 676-1844           |                                                                     |
| " " "               | 1844 | " " "                                     | 601-1919           | A second alternative                                                |
| William Cuninghame  | 1847 | The Fulfilling . . .                      | 606-1847           | Gentile times = 2,452 years                                         |
| James Halley Frere  | 1848 | The Great Continental Revolution          | 603-1847           | Gentile times = 2,450 years                                         |
| Robert Seeley       | 1849 | An Atlas of Prophecy                      | 606-1914           | Counted from "606 or 607"                                           |
| " " "               | 1849 | " " "                                     | 570-1950           | A second alternative                                                |
| " " "               | 1849 | " " "                                     | 728-1792           | A third alternative                                                 |
| Edward Bickersteth  | 1850 | A Scripture Help                          | 727-1793           | Another of his calculations                                         |
| " " "               | 1850 | " " "                                     | 602-1918           | was 677-1843                                                        |
| Anonymous           | 1856 | The Watch Tower                           | 727-1793           | A pamphlet                                                          |
| Richard C. Shimeall | 1859 | Our Bible Chronology                      | 652-1868           |                                                                     |
| J. S. Phillips      | 1865 | The Rainbow, March 1,                     | 652-1867           | A London periodical edited                                          |
| "J. M. N."          | 1865 | " " April 1,                              | 658/47-<br>1862/73 | by William Leask                                                    |
| Frederick W. Farrar | 1865 | " " November 1                            | 654-1866           |                                                                     |
| Anonymous           | 1870 | The Prophetic Times, December,            | 715-1805           |                                                                     |
| " " "               | 1870 | " " "                                     | 698-822            | A periodical edited by Joseph A.                                    |
| " " "               | 1870 | " " " "                                   | 643-1877           | Seiss et al. These are some                                         |
| " " "               | 1870 | " " " "                                   | 606-1914           | examples; the writer gives twelve                                   |
| " " "               | 1870 | " " " "                                   | 598-1922           | different alternatives!                                             |
| Joseph Baylee       | 1871 | The Times of the Gentiles                 | 623-1896           |                                                                     |
| "P. H. G."          |      | The Quarterley Journal of                 |                    | A London periodical edited by                                       |
| " " "               | 1871 | Prophecy, April,                          | 652/49-<br>1868/71 | Horatius Bonar                                                      |
| Edward White        | 1874 | Our Hope, June,                           | 626-1894           | A London periodical edited by Wm. Maude                             |
| N. H. Barbour       | 1875 | Herald of the Morning, Sept & Oct.,       | 606-1914           | Periodical published by Nelson H. Barbour                           |
| C. T. Russell       | 1876 | The Bible Examiner, October,              | 606-1914           | Edited by George Storrs                                             |
| E. H. Tuckett       | 1877 | The Rainbow, August,                      | 651/50-<br>1869/70 |                                                                     |
| M. P. Baxter        | 1880 | Forty Coming Wonders, 5 <sup>th</sup> ed. | 695-1825           |                                                                     |
| " " "               | 1880 | " " "                                     | 620-1900           | A second alternative                                                |
| Grattan Guinness    | 1886 | Light for the Last Days                   | 606-1915           | These are only some of his many, diverse analyses                   |
| " " "               | 1886 | " " "                                     | 604-1917           |                                                                     |
| " " "               | 1886 | " " "                                     | 598-1923           |                                                                     |
| " " "               | 1886 | " " "                                     | 587-1934           |                                                                     |
| W. E. Blackstone    | 1916 | The Weekly Evangel, May 13                | 606-1915           | This article sums up his viewpoints as published many years earlier |
| " " "               | 1916 | " " "                                     | 595-1926           |                                                                     |
| " " "               | 1916 | " " "                                     | 587-1934           |                                                                     |

早くは1844年にE. B. エリオットが、異邦人の時代の終わる可能性のある年として1914年を提案していた。これは彼が紀元前606年としたネブカドネザルの即位年から2,520年を数えたものである。一方N. H. バーバーは、ネブカドネザルの治世第18年におけるエルサレム滅亡から2,520年を数えた。しかし彼はこの出来事の起きた年を紀元前606年に定めたので、1875年彼もまた終結の年を1914年とする結論に達した。2人の年表は互いに一致しないだけでなく、史実として確立されているネブカドネザルの治世の年表と一致しないので、終結の年が同じになったのは偶然に過ぎない。これは彼らの行った計算が実際のところ、如何に独断的で根拠の無いものかを示している。

バーバーの計算の結果は、1876年に彼と面談したC. T. ラッセルによって受け入れられた。その時バーバーは52歳、一方ラッセルはまだ極めて若く——24歳であった。1879年春、2人は再び別の道を行くことになるが、ラッセルはバーバーの計算の結果を固持したのである。その時以来、1914年はラッセルの追隨者の間で預言を説明するのに要となる年となっている。

### 第三版およびその後の版第一章の追加

第1章に記載された情報は、本書が世に出た1983年以降、エホバの証人にとって入手出来るものであった。加うるに同じ情報は、同じ年に出版されたレイモンド・フランズ氏の広く知られた著書「良心の危機」第7章に要約されている。それで——10年を経た——1993年にものみの塔協会は、その時まで主張されていたように2,520年の計算も1914年の日付もチャールズ・ティズ・ラッセルの考案したものではない事を、ようやく認めざるを得ないと考えるに至ったのである。更にものみの塔協会は、ラッセルと彼の同志が1914年に結びつけた予言の外れたことも認めている。

この認知は、1993年にものみの塔協会が出版した、運動の歴史「エホバの証人——神の王国をふれ告げる人々」134-138頁に記載されている。1993年以前に与えられていた印象は、1914年を指し示す2,520年の計算を初めて公にしたのはラッセルであり、ジョージ・ストーズの*Bible Examiner*誌1876年10月号にそれを初めて発表したというものであった。またラッセルと彼の

追隨者は1914年の第一次世界大戦の勃発と大戦に関連する他の出来事を何十年も前に予言したとされていた。それで組織の歴史を記した、もっと前の本 *Jehovah's Witnesses in the Divine Purpose* は、「苦難の時」（最初は1874年から1914年まで続くと信じられていた）について、「世々に渉る神の経綸」（*The Plan of the Ages*）（1886年発行）に極めて概括的に述べられている事柄を引用して、こう主張していた：

これは第一次世界大戦の二十数年も前でありながら、遂に起きた出来事がかくも正確に予知されたのは驚くべき事である。（下線は筆者）<sup>85)</sup>

同様にものみの塔1971年11月1日号659～665頁に次のような自信満々の記述がある：

エホバの証人ははるか昔1877年に、1914年を重大な意義を持つ年として聖書の年表から指摘しました～

きわめて重大な年、1914年が到来し、それとともにその時までの史上最も広範囲な大動乱となった第一次世界大戦が勃発しました。それは空前の殺りく、疫病、政府の倒壊をもたらしました。世の人々はそうした恐るべきできごとを予期していませんでしたが、エホバの証人は確かに予期していました。他の人々もこの点を認めました～

エホバの証人は世界の指導者たちさえ知らないことをどのようにしてはるか事前に知りえたのでしょうか。そうした預言的な真理が彼らに知らされたのは神の聖霊による以外にありません。人類は長年の間さまざまな苦難を体験したのだから、そうしたできごとを予言するのはさほどむずかしくはないと主張する人が今日いるのは事実です。しかし、もしこうしたできごとを予言するのが難事でないのなら、政治家・宗教指導者・経済専門家すべてがそうしなかったのはなぜですか。彼らはなぜそれとは逆にことを人々に告げていたのですか。（下線は筆者）

ものみの塔協会にとって残念なことだが、これらの主張のどれ一つをとっ

ても歴史の事実とは一致しない。故意にせよ、あるいは無知のためであるにせよ、そのどれも現実をひどくねじ曲げたものと言える。

第1に、1914年に何が起きるかについて、ものみの塔協会出版物には数多くの予言があったものの、その年の世界大戦の勃発に少しでも触れた予言は皆無である。

第2に、上に引用したものみの塔誌の記述とは反対に、政治家や宗教指導者は1914年のずっと前から大きな戦争が遅かれ早かれヨーロッパで起きるだろうと思っていた。早くも1871年にドイツ帝国の初代宰相オットー・フォン・ビスマルクは、いつか「大きな戦争」が起こると明言している。1914年に先立つ何十年ものあいだ、日刊新聞と週刊誌はこの話題で持ち切りだった。多くの中から一つだけを挙げると、英国の権威ある週刊誌 *Black and White* 1892年1月号は、予想される戦争についての小説的な連載を紹介する社告で次のように説明している：

世間は戦争のうわさで持ち切りである。ヨーロッパ諸国は軍備を十分に整え、即座に動員できる態勢にある。ごく近い将来に大規模な戦争が起きるに違いない、そしてこの戦争は目新しい、驚くべき状態の下で遂行されるという点で当局の意見は一致している。凡ての事実から見て、来るべき戦争は史上最も血なまぐさいもので、全世界に重大な結果を及ぼすに違いないと思われる。この災厄を惹き起こす事件が何時起きてもおかしくない。<sup>86)</sup>

F. Clarkeは自著「1763～1984年の戦争を預言する声」(*Voices Prophesying War 1763-1984*)の中で、どの程度まで第一次世界大戦が「現実においても見かけの上でも準備されつつあったか」を説明している：

1871年以降ヨーロッパの列強は、ビスマルクが何時か起きると語っていた大戦に備えていた。半世紀近くのあいだ幕僚や内閣が武器、見通し、戦略について議論している一方で、来るべき戦争の話は政治小説の分野において格好の材料であった～1880年代から、長く予想されていた次の戦争が1914年に勃発するまでの期間、来るべき戦争はヨーロッパの小説の分野でかつてないほど多く採

り上げられた題材であった。<sup>87)</sup>

それゆえ当時の人々はヨーロッパで近く大戦が起きるという予想を否応なく、絶えず耳にしていた。問題とされたのは大戦が起きるかどうかではなく、何時起きるかである。これには様々な推測の余地があり、想像力に富む作り話や小説の多くが異なる日付を提示した。時には書名そのものに特定の年が指摘されているものさえあった。例えば1908年に出版されたMichael Wagebald 著「ヨーロッパ燃ゆ。ドイツの戦争1909年」(*Europa in Flammen. Der Deutsche Zukunftskrieg 1909*) また1906年に出版されたW. LeQueux 著「1910年の侵攻」(*The Invasion of 1910*) がある。

政治屋と政治家の中にも予想される大戦の勃発する年を正確に指摘しようと試みる人がいた。中でもフランスの下院議員 M. Francis Delaisi は運よく当てた方の1人である。1911年に行政教区の定期刊行物 *La Guerre Sociale* に掲載された記事「来るべき戦争」(“*La Guerre qui Vient*”)の中で彼は外交上の情勢を詳しく論じて「英独の間の恐るべき戦争の戦機が熟しつつある」との結論を下した。下記の抜粋から分かるように、政治情勢に関する彼の予測の一部は、驚くほど正確なことが判明した：

戦機の熟しつつある争いと比べれば、身の毛のよだつ日露戦争 [1904-05] の殺戮も兎戯に等しいであろう。

1914年には英国とドイツの [海軍] 力がほぼ伯仲する。

プロシヤ陸軍が強行軍の進撃でアントワープを占領する。

我々フランス人はベルギーの平原で戦いをすることになる。

すべての新聞は次の預言的な言葉を手のひら大の見出しに掲げるであろう：

ベルギーの中立侵される。プロシヤ軍リールに向け進撃中。<sup>88)</sup>

宗教の分野において当時、世の終わりが近いという予言をしていたのは、とりわけ「千年至福説信奉者」であった。この運動にはバプテスト、ペンテコスト派など様々な方面からの何百万人のクリスチャンが含まれる。ラッセル師と彼の追従者、「聖書研究者」はこの広範な運動の小さな一環に過ぎ

ない。これらすべてに共通なのは、将来を悲観的に見ることである。Dwight Wilsonは自著「ハルマゲドン 今！」(*Armageddon Now!*)で1914年の大戦勃発に対する彼らの反応を述べている：

後千年至福説の楽天主義に反対する、これらの人々にとって、戦争が起きた事自体は驚きではなかった；彼らはハルマゲドンで時代が極限に達すると考えたにとどまらず、近づきつつある終わりのしるしとして「戦争と戦争のうわさ」を予期していた。<sup>89)</sup>

ウイルソンは言葉を続けて、その人々の1人であるロサンゼルス<sup>90)</sup>の聖書研究所の所長R. A. Torreyが大戦前年の1913年に著した「主イエスの再来」(*The Return of the Lord Jesus*)から引用している：「我々は軍備縮小について語るが、しかしそれが実現しないことは誰もが知っている。いま目論まれている和平工作のすべては、この古い世が経験したことの無い最も恐ろしい戦争と紛争に終わるであろう！」<sup>90)</sup>

Theodore Graebnerが自著「預言から見た戦争」(*War in the Light of Prophecy*)で述べているように、1914年の戦争が始まると殆ど同時に宗教界の様々の方面から著述家があまた現われ、戦争は預言されていたと主張した：

ほどなくして幾人かの研究者が発表した：それは預言されていたと。直ちに何千人というバイブル・クリスチャンが興味を持つに至った。するとまたも直ちにゴグとマゴグ、ハルマゲドン、70週、666, 1,260その他の研究に取り組む人々が出た。間もなくこの国でも海外でも宗教を扱う定期刊行物はそのメッセージを掲載し、確信の程度に差こそあれ、それは預言されていたと宣言した。このメッセージを広めるパンフレット、小冊子が作られ、やがて1冊350頁もの本が数多く書店に並んだ。これらの書物はこの主張に対して極めて詳細な『証拠』を挙げただけでなく、同様に戦争が何時終わり、誰が勝者となり、更には千年期を正に迎えようとしていると(言われた)キリスト教教会にとって大戦が持つ意義は何かを表明していた。<sup>91)</sup>

グリーナーは数多いこれらの主張を調べる気持ちに動かされ、徹底した調査を尽くした後で次のように結論している：

～第一次世界大戦のあいだ世上をにぎわした千年期文書すべて —— それは膨大な数に上る —— は実際に起きた事から見て、確かに、ことごとく、全く間違っていたことが判明した。どの点から見ても第一次世界大戦の辿った経過は千年期至福説を解釈する文書を読んだ人々が予期したのとは全く異なるものであった。大戦の結末を予言したものは、一つとして無かった。米国の参戦を予言したものは一つも無い。第二次世界大戦を予言したものも全く無かった。<sup>92)</sup>

ヨーロッパでやがて起こるべき大戦についてラッセル師が予測した事柄も、同時代の小説家や解説者とさほど異なるものではない。1885年2月の *Zion's Watchtower* 誌に彼は書いている：「今の古い世界には暗雲が立ち込めている。ヨーロッパで大戦が起きることは近い将来における可能性の一つかと思われる」<sup>93)</sup>

2年後に当時の世界情勢について彼は1887年2月号でこう結論した：「このすべてからすると、来年の夏（1888年）にはヨーロッパのすべての国を巻き込む戦争が間近に迫っているかもしれない」<sup>94)</sup> 1892年1月15号で彼はこの戦争を「1905年頃」まで延ばすと同時に、広く予想されている大戦が1914年およびその年に期待される事柄とは無関係なことを強調している。彼が1914年に期待していたのは —— ヨーロッパ全土の戦争ではなく —— （1874年に始まったと彼が考えていた）「ハルマゲドンの戦い」の最高潮であり、その時、地球上のすべての国は打ち碎かれ、神の王国にとって替わられるとされた。彼はこう書いている：

宗教と世俗を問わず日刊紙と週刊誌、月刊誌は、ヨーロッパにおける戦争の可能性を絶えず論じている。それらは様々の国が抱く不満と野心に注目して、戦争は遠からず不可避で、一部の列強の間で何時起きるとも知れず、やがては全てを巻き込むであろうと予測している～



しかしこれらの予測が為され、またそれに尤もな理由があると多くの人が考えているとしても、我々は同調するものではない。つまりヨーロッパ全土に戦争の起きる予想が一般に思われているほど、はっきりしたものであるとは思わない～ たとえ1905年より早くにヨーロッパで戦争または革命が勃発しても、予言されている甚だしい苦難の一部とは考えない～ 戦雲はますます濃くなり、猛烈な破壊力を持つ戦争が突発するであろう。しかし1905年頃より早くこの極点に達するとは考えていない。今その方向に向かう急速な動きがあるとしても、予言された事柄にはそれだけの時間を要するからである。<sup>95)</sup>

広く予想されていた大戦は遂に1914年に始まった。しかしその年に戦争が始まる事を予言した者は恐らく皆無であり、何れにしてもチャールズ・テイズ・ラッセルと彼の追隨者はその事を予言していない。彼自身そして彼に連なる「聖書研究者」がその年に結びつけたのは全く別の事柄で、それらは起きることが無かった。同時代における千年至福説の数多い著述家の予言と同じく、彼等の予言もまた「実際に起きた事から見て、確かに、ことごとく、全く間違っていた」ことが判明したのである。

1993年に至るまでものみの塔協会が再三、主張してきたこと、すなわち自分たち、自分たちだけが「正確に」、「神の聖霊によって」1914年における大戦の勃発および他の出来事を予言していた、そして「政治家・宗教指導者・経済専門家すべてが」「それとは逆のことを人々に告げていた」というのは、明らかな歴史の事実を甚だしくゆがめるものである。

先に説明した通り、自信満々のこの主張は1993年に新しい書籍「エホバの証人 ― 神の王国をふれ告げる人々」では撤回されている。この書籍はその年、エホバの証人の地域大会においてエホバの証人の歴史を「ありのまま～呈示する」ものとして発表された。しかしそのように認めてはいても背後の事情は文脈上で最小限にしか明らかににされておらず、そのうえ言い訳がましく偏っており、ゆがめられているため、事実が明らかにされるよりは、むしろ隠されていることのほうが多い。

事実、ものみの塔協会は、ラッセルが異邦人の時の計算をネルソン H.

バーバーから引き継いだことを結局は認めている。ラッセルより1年前の1875年8月、9月および10月号「朝の先触れ」(*Herald of the Morning*)誌上でバーバーはそれを発表していた。<sup>96)</sup>

それに先立つ段落の中でこの書籍は、2,520年の計算が1914年の日付を支持するとして、19世紀の解説者を努めて援用している。この段落の左端に、「彼らは、1914年が聖書預言の中ではっきり指摘されていることを理解できた」と肉太活字で書かれている事も更に強い印象を与える。しかしそれらの解説者は注意深く選ばれた少数者で、ごく限られており、その計算は一部不明瞭であるうえ、2,520年の計算のすべてが1914年を指し示しているかのような印象を与えるものとなっている。2,520年にわたる期間の終わる年としてラッセル以前に解説者が発表した他の多くの年には全く触れていない。それでジョン A. ブラウンが「早くも1823年には」2,520年について書いている事が述べられているものの、この期間に関して彼が特にどんな適用をしたかは、続く文章の中で全くほやかされ、ゆがめられている：

しかし彼は、その預言的な期間が始まる年代や終わる年代をはっきり理解してはいませんでした。ところが彼は実際に、その「七つの時」とルカ21章24節の異邦人の時を結びつけていました。<sup>97)</sup>

それとは全く違って、本章の中で先に述べたようにブラウンは2,520年の期間が紀元前604年に始まって1917年に終わるのを強く確信していると、はっきり述べている。更に協会が下線を付した記述とは裏腹にブラウンは2,520年をルカ21:24の異邦人の時と結びつけていない。なぜならば本章で先に指摘したとおり、彼はこの聖句中に言及されている異邦人の時を2,520年の「七つの時」とは考えず、1,260年(太陰暦)と考えていたからである。(本章の注20を参照)それでブラウンの計算に関する記述は両方とも間違っていることが明白である。

ジョン A. ブラウンの他にも、ものみの塔協会は同じ段落の中でエドワード B. エリオットとロバート・シーリーを挙げ、両者とも「七つの時」の終わる可能性のある年として1914年に言及したと述べている。しかし実際に

は、ふたり共その期間の終わる年として1793年（エリオットは後に1791年に変更）をむしろ選んでいる。<sup>98)</sup>

最後に、「もっとも、そこに含まれていた議論は、後にC. T. ラッセルが退けた年代計算に基づいていました」というものの、ジョセフ・サイスその他の編集による、書名の挙げられていない出版物に1914年が重要な年として指し示されていたとある。<sup>99)</sup>

しかし実はこの事は協会の挙げた4人の解説者のすべてに当てはまる。そのすべてが（ラッセルの著作にある紀元前606年ではなく）エルサレム滅亡を紀元前588年あるいは587年とした年代計算を用いた。ブラウンがその期間の終わる年として1917年を算出したのはバーバーとラッセルのように2,520年をネブカドネザルの第18年ではなく、第1年（紀元前604年）から数えたからにはかならない。また他の3人はネブカドネザルの即位年から数えることによって1914年を算出した。その年は（現代の歴史家が確定した紀元前605年ではなく）紀元前606年であるとされていた。<sup>100)</sup>

彼らの計算はすべてラッセルと彼の追隨者が退けた年代計算に基づいているのに、これらの解説者は「1914年が聖書預言の中ではっきり指摘されていることを理解できた」とものみの塔協会は主張している。ものみの塔協会が今でも誤りと考えている年代計算を用いていた解説者たちが、どうしてこの事を「はっきり」「理解できた」と言えるのか首を傾げざるを得ない。無論のこと、読者がこのように筋道の通らない論法を見抜くには、これら解説者の著作を調べる必要がある。しかし困ったことに、ものみの塔協会の執筆者は参照できる資料を明らかにするのを避けるのが普通の事となっている。そのため、立証不可能な解釈を支持するため、また不利な証拠を覆い隠すための巧妙な方法を見抜くのは、大多数の読者にとって事実上、出来ない相談である。

すでに述べたようにものみの塔協会は以前の主張を翻して、近刊書の中では1914年と結びつけた予言が外れたことを認めている。本章の中で先に示したように、1914年に関する極めて具体的で明確な予言は、1889年に出版された「千年期黎明」（*Millennial Dawn*）第2巻76-78頁で七つの点に要約されている。これらの予言には、少しのあいまいさも無い。その論議には「事実」

キリストの臨在が目に見えないものであるという認識は、多くの聖書預言の理解を築くための重要な基盤になりました。初期の聖書研究者たちは、主の臨在が真のクリスチャンすべてのおもな関心事となるべきことを理解していました。(マルコ 13:33 - 37) 彼らは主の再来に鋭い関心を示し、自分たちにはそれを言い広める責任があるという事実をよく自覚していましたが、それでも細かいことをすべてははっきり理解していたわけではありませんでした。とはいえ、彼らがごく初期の時代に神の霊のおかげで実際に理解できるようになった事柄は、本当にすばらしいものでした。そのような真理の一つには、聖書預言が指し示している極めて重要な年代が関係していました。

### 異邦人の時の終わり

聖書の年代記述に関する問題は、それまでずっと聖書研究者たちにとって大きな関心の的となっていました。注釈者たちは、「異邦人の時」に関するイエスの預言や、「七つの時」の間たがが掛けられていた木の切り株に関するネブカドネザルの夢を記した預言者ダニエルの記録について、様々な見解を示していました。—ルカ 21:24, 欽定。ダニエル 4:10-17。

早くも1823年には、英国ロンドンで自著を出版していたジョン・A・ブラウンが、ダニエル4章の「七つの時」の長さを2,520年と計算しました。しかし彼は、その預言的な期間が始まる年代や終わる年代をはっきり理解してはいませんでした。ところが彼は実際に、その「七つの時」とルカ21章24節の異邦人の時を結びつけていました。1844年、英国の僧職者E・B・エリオットは、ダニエル書の「七つの時」が終わると考えられる年代として1914年に注意を引きましたが、それをフランス革命の時とするもう一つの見解も示していました。ロンドンのロバート・シーリーは1849年に、この点を同じように扱いました。また、少なくとも1870年までには、ジョセフ・サイスと仲間たちによって編集され、ペンシルバニア州フィラデルフィアで印刷されていた出版物が、1914年を重要な年として指しめす計算を載せていました。もっとも、そこに含まれていた論議は、後にC・T・ラッセルが退けた年代計算に基づいていました。

その後、N・H・バーバーは「朝の先触れ」誌の1875年8月号、9月号、10月号の中で、ほかの人々が指摘していた細かな点を調和させるための手がかりを与えました。バーバーは、英国の僧職者クリストファー・ボーエンがまとめ、E・B・エリオットが公表した年代計算を使い、異邦人の時の始まりをエゼキエル 21章25節と26節で予告されていたゼデキヤ王の王位剥奪の時とし、異邦人の時の終わる年として1914年を指摘しました。

1876年の初めに、C・T・ラッセルは「朝の先触れ」誌を1冊受け取りました。彼は早速バーバーに手紙を書き、それから夏の間フィラデルフィアで共に時を過ごし、特に預言的な期間について話し合いました。それからしばらくしてラッセルも、「異邦人の時：それはいつ終わるか」という題の記事の中で、この問題を

彼らは、1914年  
が聖書預言の中  
ではっきり指摘  
されていること  
を理解できた

「エホバの証人—神の王国をふれ告げる人々」の134, 135頁のそれぞれ一部分  
この運動の歴史に関するものみの塔協会の新しい本 (1993年)

「証明」「聖書からの証拠」「確立された真理」といった言葉や語句が散りばめられている。例えば1914年が「不完全な人間の支配の崩壊」を見る年となることは、「聖書によってしっかりと確証された事実」であると述べられている。<sup>101)</sup>

協会の新しい歴史の本は、このような予言に当初、詰め込まれていた自信満々の主張、極めて独断的な言い回しをどのように扱っているだろうか。それらを取り繕う、あるいは全く隠すことをしている。前述の「千年期黎明」第2巻にある異邦人の時の論議に言及した際——しかし実際の記述の引用は一切しないで——ものみの塔協会是这样問いかけている：「異邦人の時の終わりは何を意味することになるのでしょうか」その驚くべき答とは、「聖書研究者たちは、何が起きるかを完全には把握していませんでした」！

予言の内容に短く触れた場合も中にはあるが、ものみの塔協会はそれらを「予言」または「預言」と称するのを注意深く避けている。ラッセルと彼の同志が何かを「予言」あるいは「予告」したことは一切無い、「証拠」あるいは「確立された真理」を提出すると言ったことも無い。彼らは「考えた」「期待した」、これ又はあれが起きる「かもしれない」と「熱烈に望んだ」、しかし「全く確かな訳ではなかった」<sup>102)</sup> それで予言すなわち1914年までの4半世紀あまりの間、国際聖書研究者が世界に向けて盛んに宣伝した世の終わりの日のメッセージが本当はどんなものであったかは、このような言葉で覆い隠されている。あいまいな語句を控えめに用いることにより、僭越な予言を実際とは異なるものに見せかけるならば、予言が外れたことを「謙そんに」認めるのが容易くなるというものである。

## 第1章 注

1. LeRoy Edwin Froom, *The Prophetic Faith of Our Fathers* (Washington, D.C.: Review and Herald Publishing Association, 1948), Vol. II, p.124.
2. この預言は「週」について述べているが、その事自体は「日を年にする原則」をここで都合良く適用する理由にはならない。ユダヤ人にとってヘブライ語の「週」*shabua* は英語とは異なり、七日の期間を常に意味した訳ではない。

*shabúa* 文字通りには七の(期間)または「七つぞろい」を意味する。ユダヤ人はまた「七つ」(*shabúa*)の年を有していた。(レビ記25:3,4,8,9)「週の年数」を意味する場合、普通「～年」の語を加えたのは確かである。しかし後期ヘブライ語では、この語は当然にあるものとして省かれることが多かった。「週の日数」を意味する場合、*shabúa* の出ているダニエル書の他の節(10:2,3)に見られるように、「～日」の語が添えられる事も時として可能だった。ゆえにダニエル書9:24は「七十個の七が定められている」と明白に述べるに過ぎず、文脈上(2節にある「七十年」)、「七十個の七の年数」が意図されていると結論して差し支えない。ダニエル書9:24で「七十週の年」となっている翻訳(*Moffatt, Goodspeed, AT, RS*)があるのは、「日を年とする原則」のためではなく——本文の上で明らかな関連が認められるためである。

- 3 Froom, Vol. II, pp195, 196.
- 4 *Ibid.*, p.196. Nahawendiは復ダニエル12:11の1,290日を年数の期間として数え、第二神殿の破壊された年〔西暦70年〕を起点としたので、同じ西暦1358年という結果を得た。
- 5 *Ibid.*, pp.201, 210, 211.
- 6 E. B. Elliott, *Horæ Apocalypticæ* 3<sup>rd</sup> ed. (London, 1847), Vol. III, pp.233-240.
- 7 Charles Maitland, *The Apostles' School of Prophetic Interpretation* (London, 1849), pp. 37, 38.
- 8 E. B. Elliott, *Horæ Apocalypticæ*, 3<sup>rd</sup> ed. (London, 1847), Vol. III, p. 233.
- 9 *Ibid.*, p. 240. 日を年にする理論の現代における擁護者故LeRoy Edwin Froom 博士は四巻の大著 *The Prophetic Faith of Our Fathers* の中で同様な結論に達している。第一巻(1950年)700頁に次の記述がある:「今まで13世紀のあいだ70週が70週の年数を表すものと一般に理解されていた。しかしキリスト教時代の最初の千年間にキリスト教の著作家の間では、黙示録2:10の『10日』を迫害の10年、また黙示録11章の3日半を3年半とした極めて短い一つ二つの解釈を除いて、この原則を用いた例を見ない。しかし今やヨアキムが初めて、日を年にする原則を1260日の預言に適用したのである」
- 10 Froom, Vol. I, p. 716.
- 11 *Ibid.*, pp. 717, 723, 726, 727. この情報は(Froomが論じている)著作 *De Seminibus Scripturarum*, fol. 13v, col. 2に基づく。これは西暦1205年に書かれたものである。この写本はVat. Latin 3813として知られている。
- 12 Arnold of Villanova, *Tractatus de Tempore Adventus Antichristi* (「反キリストの現われる時に関する論文」), part 2 (1300); reprinted in Heinrich Finke, *Aus den Tagen Bonifaz VIII* (Münster in W., 1902), pp.CXL VIII-CLI, CXL VII. (See also Froom, Vol. I, pp. 753-756.)
- 13 From *Registrum Johannis Trefnant, Episcopi Herefordensis* (containing the proceedings of the trial of Walter Brute for heresy), as translated in John Foxe, *Acts and Monuments*, 9<sup>th</sup> ed. (London, 1684), Vol. I, p. 547. (See also Froom, Vol. II, p. 80.)

- 14 John Napier, *A Plaine Discovery of the Whole Revelation of Saint John* (Edinburgh, 1593), pp. 64, 65. (See Froom, Vol. II, p. 458.)
- 15 G. Bell, "Downfall of Antichrist," *Evangelical Magazine* (London), 1796, Vol. 4, p. 54. (See Froom, Vol. 2, p. 742.) Although published in 1796, the article was written July 24, 1795.
- 16 G. Bell, *ibid.*, p. 57. (See Froom, Vol. II, p. 742.)
- 17 Robert Fleming, Jr., *The Rise and Fall of Papacy* (London, 1701), p. 68. (For additional Notes on this prediction, see Chapter 6, section D: "1914 in perspective.")
- 18 Professor Robert Gilpin, "The Theory of Hegemonic War," *The Journal of Interdisciplinary History*, (published in Cambridge, MA, and London, England), Vol. 18:4, Spring 1988, p. 606. (Emphasis added.)
- 19 R. R. Palmer in his foreword to Georges Lefebvre's *The Coming of the French Revolution* (New York: Vintage, 1947), p. v.
- 20 ブラウンの年代計算は最初ロンドンの月刊誌 *The Christian Observer* 1810年11月号に発表された。異邦人の時に関する彼の理解によると、「踏みじける異邦人」とはマホメット教徒（イスラム教徒）であった。従って大いに喧伝された1,260年はマホメット教の太陰暦の年数であり、太陽暦では1,222年に相当すると彼は考えていた。彼はこの期間を西暦622年（マホメット教のヘジラ紀元第一年）から1844年までと数え、この年にキリストが現われ、またユダヤ民族がパレスチナに復帰するのを期待した。—— J. A. Brown, *The Even-Tide*, Vol. I (1823), pp. vii, xi, 1-60.
- 21 再臨は春から春までを一年とするユダヤ暦で1843/44年に起きると期待された。米国の解説者はブラウンとは無関係に2,300年の終わりを1843年とする結論に達していたとされる。その通りかもしれないが、証明は出来ない。興味深いことに、1802年に創刊された英国ロンドンの定期刊行物 *Christian Observer* は英国版と全く同じ内容の米国版がボストンで発行されている。従って2,300年に関するブラウンの記事が1810年には既に米国で多くの人に読まれていたとしても、それは大いに有り得る。その後ほどなくして1843年という日付は米国の預言解説書に採り上げられ始めた。
- 22 Published in London; the pertinent material is found in Vol. II, pp. 130-152.
- 23 Froomの *The Prophetic Faith of Our Fathers* 第4巻404,405頁の表の故この記述に異議を唱える向きがあるかもしれない。確かにこの表からすると、2,520年について書いたのは1813年の *James Hatley Frere* が最初のように見える。しかし表の一部405頁の最右端「他の期間の年代測定」と題された部分は404頁の「発表の日付」欄と何ら密接な関係がなく、他の期間について著者の一般的な考えを述べているに過ぎない。その上Frereは異邦人の時（または「七つの時」）が2,520年であると主張したことは一度もない。預言に関する最初の著作 *A Combined View of the Prophecies of Daniel, Esdras, and St. John* (London, 1815) の中で、彼はダニエル4章とルカ21:24の何れにも注釈を加えていない。彼は次のよう

に説明している。黙示録11:2の「聖なる都」は「キリストの見える教会」であり、「1,260年の期間に亘り、神殿の内陣を除いてこの都はくまなく異邦人に踏みにじられる」(87頁)多くの年月を経て後、Frereは異邦人の時が前603年から西暦1847年までの2,450年の期間であると計算した。例として彼の次の著書を参照。*The Great Continental Revolution, Making the Expiration of the Times of the Gentiles A.D.1847-8* (London, 1848). 特に注目できるのは66-78頁。John A. Brownが預言に関する当時の多くの著作に精通していた事は無論である。Frereは英国の最も著名な解説者の一人であった。それで2,520年に関して自分が優先するとしたBrown自身の言葉を疑う理由はないと思われる。

- 24 *The Even-Tide*, Vol. II, pp. 134,135; Vol. I, pp. XLIII, XLIV.
- 25 Henry Drummond, *Dialogues on Prophecy* (London, 1827), Vol. I, pp. 33, 34. Alburyにおける討論の、この報告書の中で、参加者は架空の名前で呼ばれている。Cuninghame (“Sophron”)はダニエル書4章の「七つの時」あるいはレビ記26章に言及せずに1,260年を二倍にすることによって2,520年を算出しており、その根拠として十七世紀の解説者Joseph Medeを権威として挙げている。Medeは異邦人の時がバビロンに始まる四つの王国を指すのではないかと述べているが、2,520年のことは一切述べていない。(Mede, *The Works*, London, 1664, Book 4, pp. 908-910, 920.) 後の話の中で“Anastasius”(Henry Drummond)は2,520年をレビ記26章の「七倍」と結びつけた。更にCuninghameの起算点を前728年から722年に「訂正」した上で、終点となる年が西暦1798年であるとの結論に達した。(Dialogues, Vol. I, pp. 324, 325)
- 26 John Fry (1775-1849)はこの事を行った人のひとりである。1835年出版の著書 *Unfulfilled Prophecies of Scripture*.
- 27 彼の著書の48頁の記述。FroomのVol. III, p. 576に引用されている。
- 28 Cashelのchancellor W. A. Holmesも同様。1833年出版の著書 *The Time of the End*. マナセがエサルハaddonに捕らえられた年を前685年として彼はその年から2,520年を数え、「七つの時」のが終わるのは1835-1836年であるとした。
- 29 Edward Bickersteth, *A Scripture Help*, 最初に編集されたのは1815年。1832年以後にBickerstethは預言について説き始め、*A Scripture Help*の後の諸版にもその影響が見られる。引用は第20版 (London, 1850), p. 235からのものである。
- 30 E. B. Elliott, *Horæ Apocalypticæ* 1<sup>st</sup> ed. (London: Seeley, Burnside, and Seeley, 1844), Vol. III, pp. 1429-1431. Elliottの著作は五版を重ねた。(1844, 1846, 1847, 1851, 1862) 最後の二つの版で、2,520年をネブカドネザルの治世の初めから数える可能性がなお示唆されているものの、1914年のことは直接には触れられていない。
- 31 David Tallmadge Arthur, “Come out of Babylon”: *A Study of Millerite Separatism and Denominationalism, 1840-1865* (未発表の博士論文、University of Rochester, 1970), pp. 86-88.
- 32 William Miller, “A Dissertation on Prophetic Chronology” in *The First Report of the*



*General Conference of Christians Expecting the Advent of the Lord Jesus Christ* (Boston, 1842), p. 5. 2,520年を強調したミラー派の他の人々には以下が含まれる: Richard Hutchinson (editor of *The Voice of Elijah*) in an 1843 pamphlet, *The Throne of Judah Perpetuated in Christ*, and Philemon R. Russell (editor of the *Christian Herald and Journal*) in the March 19, 1840 issue of that periodical. 2,520年はミラー派福音伝道者の用いた図表にも記されている。(See Froom, Vol. IV, pp. 699-701, 726-737.)

- 33 「時期の点で私は間違っていた。率直にその事を認めます; 私の行為に対して今まで純粹の動機で釈明を尽くしてきました。それ以外の事をしたいとは思いません。それで結局は神に栄光が帰せられたのです。私の間違いと誤りを神は許されると信じています～」(Wm. Miller's *Apology and Defence*, Boston, 1845, pp. 33, 34) ジョージ・ストーズはこれよりも更に率直である。ミラー派運動の最終段階、いわゆる「七ヵ月運動」と呼ばれた時期に彼は指導者の一人であった。この時期に再臨は最終的に1844年10月22日に確定されていた。彼は自分の誤りを率直に何度も認め、かつ遺憾に思っただけではない。「時を定める」運動は神から出たものではなく、人間の影響に「魅惑されて」いただけのことで、「時が定められているという教えは聖書には全く無かった」とさえ公言している。(See D. T. Arthur, *op. cit.*, pp. 89-92.)

- 34 この教義の発展を解明する論議については以下を参照。Dr. Ingemar Linden, *The Last Trump, A historico-genetical study of some important chapters in the making and development of the Seventh-Day Adventist Church* (Frankfurt am Main, Bern, Las Vegas: Peter Lang, 1978), pp. 129-133. 後年この教義には変更が加えられ、信者——生者と死者——のいわゆる「取り調べの裁き」が1844年10月22日に始まったという意味になった。
- 35 Froom, Vol. IV, p. 888. これらの見解の詳細な論議はDr. D. T. Arthurによって行われている。*op. cit.*, pp. 97-115.
- 36 著名なキリスト再臨論者J. P. Cowlesの1855年の推定によれば、かつて一つであった再臨論者の組織体に「およそ二十五の分派」が存在していた。(See D. T. Arthur, *op. cit.*, p. 319.)
- 37 Isaac C. Wellcome, *History of the Second Advent Message* (Yarmouth, Maine, Boston, New York, London, 1874), pp. 594-597.
- 38 Nelson H. Barbour, *Evidences for the Coming of the Lord in 1873; or the Midnight Cry*; 2<sup>nd</sup> ed. (Rochester, N. Y., 1871), p. 32
- 39 *Ibid.*, p. 32
- 40 *Ibid.*, p. 33; E. B. Elliott, *Horæ Apocalypticæ*, 4<sup>th</sup> ed. (London: Seeleys, 18519, Vol. IV; 236頁に遊び紙が添えられている。Elliottの著作は1860年の当時、主の来られる時として1866年を先立って主張する標準的な書物であった。
- 41 Nelson H. Barbour (ed.) *Herald of the Morning* (Rochester, N.Y.), September 1879, p. 36.

実際のところ Barbour の新しい再臨の日付は、キリスト再臨論者とくに Advent Christian Church の内部で次第に広く採り入れられた。明らかにバーバーはこの教会と長年のあいだ交わっていた。1873年の日付がこれほど容易に受け入れられた一つの理由は、それが新奇なものではなかった事にある。バーバーが自著 *Evidence*… (pp. 33, 34) で指摘しているとおり、ミラー自身1843年が失敗に終わった後で1873年の事を述べていた。1843年以前、英国の数人の解説者、たとえば1835年に John Fry また1842年に George Duffield は1,335年が1873年に終わるとした。(Froom, Vol. III, pp.496, 497; Vol. IV, p. 337) 「来る時代」のキリスト再臨論者 Rochester N. Y. の Joseph Marsh は早くも1853年に彼以前の解説者と同様、「終わりの時」は1798年に始まる75年の期間で1873年に満了すると結論していた。(D. T. Arthur, op. cit., p. 360) 1870年著名なキリスト再臨派のキリスト教伝道者 Jonas Wendell は彼のパンフレット *The Present Truth; or Meat in Due Season* (Edenboro, PA, 1870) にバーバーの年表を載せている。日付に関する関心が高まったため、Advent Christian Church は、主の再臨の時期とりわけ1873年について調べるため、1872年2月6～11日に Worcester, Mass. で特別な会議を開くことになった。バーバーを含め、多くの説教者が討論に参加している。1872年3月12日の *Advent Christian Times* は次のように報じた。「全異議なく一致したと思われる論点は、千三百三十五年が1873年に終わることである」(p. 263)

- 42 Nelson H. Barbour (ed.), *The Midnight Cry, and Herald of the Morning* (Boston, Mass.) Vol. I:4, March, 1874, p.50.
- 43 N. H. Barbour, "The 1873 Time", *The Advent Christian Times*, Nov. 11, 1873, p. 106.
- 44 *Zion's Watch Tower*, October and November 1881, p. 3 (=Reprints, p. 289).
- 45 キリスト再臨のこの考えは、初め1828年頃にロンドンの銀行家で預言解説者の Henry Drummond によって提示された。その世紀の残りの期間、預言解説者、中でも特に普及に貢献した Darbyists の間で急速に広まった。また千年至福説の主要な定期刊行物、英国では *Quarterly Journal of Prophecy* (1849-1873) および *The Rainbow* (1864-1887) 誌上、米国においては *Prophetic Times* (1863-1887) 紙上で盛んに論じられた。(C.T. ラッセルと彼の同志を含め、再臨論者の社会で広く読まれた) この新聞の編集長はルーテル派の牧師 Joseph A. Seiss であった。——「見えない臨在」という考えの起源と伝播については次の雑誌に調査研究がある。*The Christian Quest* (Christian Renewal Ministries, San Jose, CA), Vol. 1 :2, 1988, pp. 37-59, Vol.2:1, 1989, pp. 47-58.
- 46 *Zion's Watchtower*, February 1881,p.3, and October-November 1881, p.3 (=Reprints, pp. 188 and 289).
- 47 *Ibid.*, April 1880, p.7 (=Reprints, p.88).
- 48 実際のところバーバーは既に1875年7月号の *Herald of the Morning* 誌上で異邦人の時がゼデキヤの治世の終わる、前606年に始まったと述べており、この計算の結果を暗示している。しかしその終わりの日付を直接には述べていない(15

頁)。7月号には異邦人の時が「なお四十年続く」とある。これは1915年を指し示すように思われるが、バーバーが1914年を考えていた事はその後の号から明らかである。8月号には「年代学」に関する記事(38-42頁)が載せられているものの異邦人の時を論じた記事はない。1914年という年が直接に採り上げられたのは1875年9月号が最初である。52頁に以下の記述がある:「福音の時代は1878年に終わるものの、1881年までユダヤ人はパレスチナに帰還しないであろうと私は思う;また『異邦人の時』即ち1260年を倍した2520の預言的な七つの時、すなわち神が前606年ネブカドネザルにすべてをお与えになった時から始まる期間は西暦1914年まで終わらない;つまり今から40年後のことである」この計算の詳しい論議はその後1875年10月号74-76頁に発表された。

- 49 チャールズの両親 Joseph L. と Ann Eliza (Birney) Russell は共にスコットランド・アイルランド系で、1845-1849年のアイルランド大飢饉に際してアイルランドを離れた。この飢饉で餓死した人は150万人に上り、100万人が海外に移住している。ジョセフとエリザはアレゲーニーに定住し、チャールズはそこで三人の子供の二番目に生まれた。エリザは1860年頃に没したので、ジョセフが子供たちを育てることになった。少年時代、暇な時間の大半を父親の衣料品店で過ごしチャールズは、若くしてジョセフの共同経営者となった。“J.L. Russell & Son, Gents' Furnishing Goods” は成功して、アレゲーニーとピッツバーグに五つのチェーンストアを出すまでになった。—— 更に詳しくは次を参照。M. James Penton, *Apocalypse Delayed. The Story of Jehovah's Witnesses* (Toronto, Buffalo, London: University of Toronto Press, 1985, 1997), pp. 13-15.
- 50 *Zion's Watchtower*, July 15, 1906, pp. 230, 231 (=Reprints, p. 3822).
- 51 *Ibid.* 1879年 *Zion's Watchtower and Herald of Christ's Presence* 創刊号と共に送られた2頁の“Supplement to Zion's Watch Tower” “To the readers of Herald of the Morning”の中で、ラッセルは1876年に Barbour と彼の同志 John Paton に会った結果、その後三年間にわたって「収穫の音信」を協力して広めることになった経緯また1879年に Barbour と袂を分かち、自身の新聞を発行するに至った理由を説明している。
- 52 これはラッセル自身次のように述べている事からも分かる:「～我々が初めて出会った時、すべての人のために与えられた十分な贖いに基づいて万物が改まり、満ち足りることにつき、彼は私から多くを学ぶ点がありました。同様に私は時に関して彼から多くを学んだのです」—— *Zion's Watchtower*, July 15, 1906, p. 231 (=Reprints, p. 3822).
- 53 C. T. Russell, *The Time is at Hand* (=Vol. II of the *Millennial Dawn* series; later called *Studies in the Scriptures*), Pittsburgh: Watch Tower Bible and Tract Society, 1889, pp. 77, 78. 予言の一部には後の版で幾らかの変更が加えられている。
- 54 *Zion's Watch Tower*, July 15, 1894 (=Reprints, p. 1677).
- 55 *Ibid.*, September 15, 1901 (=Reprints, p. 2876).

- 56 *Ibid.*, July 1, 1904, pp. 197, 198 (=Reprints, p. 3389).
- 57 *Ibid.*, October 1, 1904, pp. 296, 297 (=Reprints, pp. 3436, 3437).
- 58 *Ibid.*, August 15, 1904, pp. 250, 251 (=Reprints, p. 3415). 下線は筆者
- 59 *Ibid.*, November 15, 1904, pp. 342-344; June 15, 1905, pp. 179-186 (=Reprints, pp. 3459, 3460, 3574-3579).
- 60 C. T. Russell, *The Time is at Hand*, p. 169.
- 61 *Zion's Watch Tower*, October 1, 1907, pp. 294, 295 (=Reprints, p. 4067).
- 62 *Ibid.*
- 63 *The Watch Tower*, December 1, 1912 (=Reprints, pp. 5141, 5142). 第一次世界大戦の勃発は1914年であり、その年は異邦人の時の終わる年として保持されたので、その始点は2,520年を維持するために前606年から607年に一年だけ繰り上げることが必要になった。協会の支持者の中にはこの事実を極めて早くに指摘した人もいた。(see, for example, the footnote on page 32 of John and Morton Edgar's *Great Pyramid Passages*, 2<sup>nd</sup> ed., 1924) しかし必要なこの調整がものみの塔協会によって為されたのは1943年であり、*The Truth Shall Make You Free*の239頁においてであった。See also the book, *The Kingdom is at Hand*, 1944, p. 184. 詳細は次章61頁を参照
- 64 *The Watch Tower*, June 1, 1913, pp. 166, 167 (=Reprints, p. 5249).
- 65 *Ibid.*, October 15, 1913, p. 307 (=Reprints, p. 5328). 下線は筆者
- 66 *Ibid.*, January 1, 1914, pp. 3, 4 (=Reprints, p. 5373).
- 67 *Ibid.*, pp. 4, 5 (=Reprints, p. 5374). 下線は筆者
- 68 *Ibid.*, May 1, 1914, pp. 134, 135 (=Reprints, p. 5450). 下線は筆者
- 69 *Ibid.*, July 1, 1914, pp. 206, 207 (=Reprints, p. 5496). 下線は筆者
- 70 *Ibid.*, August 15, 1914, pp. 243, 244 (=Reprints, p. 5516).
- 71 *Ibid.*, November 1, 1914, pp. 327, 328 (=Reprints, p. 5567).
- 72 *Ibid.*, pp. 329, 330 (=Reprints, p. 5568).
- 73 *Ibid.*, January 1, 1915, pp. 3, 4 (=Reprints, p. 5601).
- 74 *Ibid.*, September 15, 1915, pp. 281, 282 (=Reprints, p. 5769).
- 75 *Ibid.*, February 15, 1916, pp. 51, 52 (=Reprints, p. 5852).
- 76 *Ibid.*, April 15, 1916 (=Reprints, p. 5888).
- 77 *Ibid.*, September 1, 1916, pp. 263, 264 (=Reprints, p. 5950).
- 78 See above, pages 50, 51. 1914年以降、長い間にわたって「苦難の時」(マタイ 24:21, 22) は実際にその年に始まったと思われていた。しかしものみの塔協会は漸く1969年になってこの見解を放棄した。('ものみの塔' 1970年4月15日号 237-244頁を参照)
- 79 A. H. Macmillan, *Faith on the March* (New York: Prentice Hall, Inc., 1957), p. 48.
- 80 New Heavens and a New Earth (Brooklyn, N.Y.: Watchtower Bible and Tract Society, 1953), p. 225. 1922年まで即ち四十年以上の間、the Bible Studentsは神の王国が西

暦1878年に天で建てられ始めた信じ、また教えていた。この出来事は今や1914年に移された。—— *The Time is at Hand* (Vol. II of Millennial Dawn), 1889, p. 101 を参照。

- 81 See the article “Birth of a Nation” in *The Watchtower* of March 1, 1925.
- 82 *The Watchtower*, October 1, 1922, p. 298; November 1, 1922, p. 334.
- 83 From *Paradise Lost to Paradise Regained* (Brooklyn, N.Y.: Watchtower Bible and Tract Society, 1958), p. 192.
- 84 1929年の時点でも尚 the Watch Tower Society は「主イエス・キリストの再臨在は西暦1874年に始まった」と教えていた。( *Prophecy*, Brooklyn, N.Y.: International Bible Student Association, 1929, p. 65.) 再来の年を1874年から1914年に移した正確な日付を指摘することは困難である。しばらくの間、紛らわしい記述が出版物に見られるようである。この変更が最初に認められるのは恐らく1930年4月30日の *The Golden Age* 503頁の次の記述である。「イエスは1914年以来ずっと臨在されている」しかし *The Watch Tower* 1930年10月15日号308頁には「イエス・キリストの再臨は1875年頃までさかのぼる」とあり、ややあいまいに表現されている。次いで、1931年の冊子 *The Kingdom, the Hope of the World* 48頁によれば、再来は1914年にあったことが再び示されている。そして1932年の冊子 *What is Truth* の48頁には次の明白な記述がある：「預言の成就となる実際の明白な出来事から十分に裏付けられるとおり、聖書預言はキリストの再来が1914年秋にさかのぼる事を示している」
- 85 *Jehovah's Witnesses in the Divine Purpose* (Brooklyn, New York: Watchtower Bible & Tract Society, 1959), p. 31.
- 86 Quoted by I. F. Clarke in *Voices Prophesying War 1763–1984* (London: Oxford University Press, 1966), pp. 66, 67.
- 87 *Ibid.*, p. 59.
- 88 Quoted by Theodore Graebner in his book, *War in the Light of Prophecy. “Was it Foretold?” A Reply to Modern Chiliasm* (St. Louis, Mo., Concordia Publishing House, 1941), pp. 14, 15.
- 89 Dwight Wilson, *Armageddon Now!* (Grand Rapids: Baker Book House, 1977), pp. 36, 37.
- 90 *Ibid.*, p. 37.
- 91 Graebner, *op. cit.*, p. 8, 9.
- 92 *Ibid.*, pp. 9, 10.
- 93 *Reprints*, p. 720.
- 94 *Reprints*, p. 899.
- 95 *Reprints*, pp. 1354–1356.
- 96 「エホバの証人 —— 神の王国をふれ告げる人々」(ものみの塔聖書冊子協会 日本 東京都、1993), 134頁

- 97 *Ibid.*, p. 134.
- 98 ものみの塔協会は参照箇所を明白にしていない。E. B. Elliottが彼の年代計算を最初に発表した書物:*Horae Apocalypticæ*, 1<sup>st</sup> ed. (London: Seeley, Burnside, and Seeley, 1844), vol. III, pp. 1429-1431. Robert Seeley が彼の年代計算を発表した書物: *An Atlas of Prophecy: Being the Prophecies of Daniel & St. John* (London: Seeley's, 1849), p. 9. 本書第1章注30も参照。
- 99 書名の挙げられていない出版物は *The Prophetic Times* 誌である。この計算は匿名の寄稿者の記事“Prophetic Times. An Inquiry into the Dates and Periods of Sacred Prophecy”の中にあり、1870年12月号の177-184頁に載せられている。著者は178頁および179頁に異邦人の時代の起点として前728年から598年までに亘って12の異なる年を挙げており、そのため西暦1792年から1922年にまで及ぶ12の異なる年を算出する結果になっている！ 1914年はこれら終結する年の最後から二番目である。1914年を指し示す計算はネブカドネザルの即位年から数えていて、著者はElliottとSeeleyと同じく、これを前606年としている。それで彼もまたエルサレム滅亡を前588年または587年に位置づけた年表を踏襲しており、ラッセルの著作の前606年あるいはその後のものみの塔出版物の前607年を用いていない。
- 100 本章で述べたようにバーバーとラッセルもまた異邦人の時代を前606年に始めている。但しこれはネブカドネザルの第十八年におけるエルサレム滅亡の年とされている。前606年は協会の新しい書籍のどこにも言及されていない。おそらくその理由は今日、協会が前607年を起点として用いているからであろう。故に以前の日付を読者に連想させるのは、少なくとも経緯を知らない人々にとっては紛らわしいだけではあるまいか。1944年 (*The Kingdom is at Hand*, p.175 で) 起点の年を前606年から607年にか変えた協会が終結の日付として尚1914年を保持していることには独自の不思議ないわれがある。その辺の事情は“Karl Burganger” (筆者が当時用いたペンネーム) の冊子 *The Watchtower Society and Absolute Chronology* (Lethbridge, Alberta, Canada, 1981) に詳しい。次章58-66頁を参照
- 101 *The Time is at Hand* (=Vol. II of *Millennial Dawn*, later called *Studies in the Scriptures*), Pittsburgh: Watch Tower Bible & Tract Society, 1889, pp. 76-102.
- 102 「エホバの証人 ― 神の王国をふれ告げる人々」(1993年), 135頁

## 訳者あとがき

聖書の読み方、理解の仕方は一通りではない。物の姿かたちを正確に知るには「群盲評象」の諺どおり、一部分だけではなく全体を見る必要がある。この事は聖書研究においても同様で、ある宗派の解釈を聞き、一通り学んだだけでそれが真実であると結論する間違いをしない最善の方法は、異なる考えに耳を貸すことである。本書はエホバの証人が熱意と信仰を抱いて世界的に広めている教えの信憑性と、その主張の根拠を検証すると共にエホバの証人の教えに対する異論また証拠に基づく反論を提起している。この訳をお読み下さる方は、双方の言い分を聞き、証拠を調べた上で心証を形成する裁判官と同様な立場にある。客観性がなく、自分だけが正しいと思っている独善、権威を絶対視して無批判に従う権威主義に捕らわれているのは「大海を知らずにいる井の中の蛙」と同じであり、「知らぬが仏」の座に安住しているのは誤謬を犯す危険と隣り合わせではあるまいか。批判的思考力を働かせることによって信仰の根拠を自ら確かめる一助にして頂けるならば望外の幸いである。

末筆ながら本書の出版にあたり一方ならぬご助力を頂いたせせらぎ出版の山崎亮一氏にお礼を申し上げたい。

2019年 2 月

クリスチャンブック研究会

※訳に関する注：原書の図版の一部また図版に添え書きされた出典および索引は省かれています。

※主に引用した聖書：

新世訳：1982年/1985年ものみの塔聖書冊子協会出版の新世界訳聖書〔日本語版〕

新共同訳：プロテスタント、カトリック両教会の共同事業として翻訳され、1987年、日本聖書協会により出版された聖書

●装幀——上野かおる

異邦人の時 再考 —年代学とキリストの再臨—  
増補改訂版(第4版)

---

2019年6月25日 電子本発行

著 者 C. O. ヨンソン

訳 者 クリスチャンブック研究会

発行者 山崎亮一

発行所 せせらぎ出版

〒530-0043 大阪市北区天満1-6-8 六甲天満ビル10階  
TEL. 06-6357-6916 FAX. 06-6357-9279

---

©2019 ISBN978-4-88416-803-2

せせらぎ出版ホームページ <http://www.seseragi-s.com>  
メール [info@seseragi-s.com](mailto:info@seseragi-s.com)



# The Gentile Times Reconsidered

Chronology and Christ's Return

*Carl Olof Jonsson*